
俺と女王様

蒼山れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と女王様

【Zコード】

Z3748M

【作者名】

蒼山れい

【あらすじ】

俺の幼なじみはわがままな女王様。今日も今日とて俺は彼女に振り回されつ放し。嗚呼、俺の安息はいつどこに?・ヘタレなツツコミと我が道を突つ走る女王様(+)が贈る、どたばた恋愛喜劇。

Act・1 僕と女王様（前書き）

まづは日常編。

Act・1 僕と女王様

幼なじみという関係ほど厄介なものはない。しかもそれが生まれたときからのつき合にならば、尙更だ。

「おいでこ、邪魔だ。どけ」

おそろしく尊大な台詞と一緒に、背中にげしつと衝撃が降つてき
た。

「いひつ」

前のめりになつた勢いで、思わずコントローラーの操作を誤つてしまつ。本来押すべきAボタンではなく、滑つた俺の親指はBボタンを押していた。

次の瞬間、ブラウン管の向こうのキャラクターは見当違ひな回復魔法をくり出し、敵の必殺技をまとめて食らつた。

「あ

「ああつ！」

田にも止まらぬ速さでエロPが削られていく　あつといつ間にゼ
ロになる。

どこか間抜けなメロディが流れ、キャラクターは地面に倒れた。

「あーあ、ゲームオーバー」

まったく悪気のない声に、俺はキッと背後を振り返つた。

「てつんめえ、いきなりなにしやがんだ！」

「だつて邪魔なんだもん。どけって言つてもどかないしー」

「当つたり前えだろうがっ！　なんでわざわざ俺がどかなくちゃなんねえんだよ！？　充分横通れるじゃねえかー」

しかし俺の睨みもなんのその。彼女はふんっと鼻を鳴らすと、馬鹿にしきつた笑みを浮かべた。

「あたしが通りたいと思えば、そこがあたしの道なのよ」

横暴だ。

なんという自己中心的な考え方。世界はあたしのために回ってんのよ、当然でしょ、と言わんばかりの彼女の態度に、俺は脱力した。「……おまえさあ、他人の部屋に断りもなく入つてきて言つことがそれかよ」

「はじめの部屋はあたしの部屋なんだから、あたしのビーナスヒルと勝手でしょ」

おまえはどじのガキ大将か。

「ほりほり、わっせとおどき。苑香様のお通りよ
まるで野良犬でも追い払つように、彼女はしつしつ手を動かした。俺はため息をくと、なるべくゆつくつと立ち上がる。せめてもの反撃に。

「ぐずぐずすんな！」

「うお！」

すぐに蹴りが飛んできて、慌てて退避したが。

……我ながら情けない。

彼女は女王のごとき足取りで歩いていき、俺のベッドに腰かけた。わざとらしく長い髪を後ろに払いながら優雅に足を組む。サブリナパンツから覗く、白い足首を見せつけるようだ。

俺はテレビのほうを向くフリをして、彼女から目を逸らした。

「ほらほら、せっかくこのあたしが来てあげたのよ？ わたさんとお茶なりお菓子なり持つべきなさいよ」

「……別に、だれも来てくれなんて頼んでねえんだけど」

ゲーム機の電源を切りながらちらりと窺うと、彼女は不敵に微笑んだ。

「嘘つけ。嬉しいくせに」

確信に満ち溢れた言葉に、俺は一瞬、声を詰まらせた。

「嬉しくねえよ」

「素直じゃないなあ、はじめは

彼女はにやにやと目を細めながら爪先を泳がせている。パールピングに染まつた小さな爪が、桜の花びらのようだつた。

「だつたらなんで、部屋から出でていこうとしてるのかなあ？」

追いかけてくる声は、悔しこほどにたつぱりと余裕を滲ませてい

た。俺はドアノブに手をかけると、白旗を振るような気持ちで叫んだ。

「おまえが持つてこいつて言つたんだろうがー」

「うん、よろしく」

彼女は満足そうに頷いた。その笑顔をかわいいなどと想つてしまつたのは、氣のせいではない。

俺は深く長いため息をついた。

まったく、幼なじみという関係ほど厄介なものはない。しかもそれが生まれたときからのつき合にならば、尚更だ。

家族ではなく、友達でもなく、ましてや恋人でもない、曖昧でいながら距離感のない関係。これほど気安く、心地いい結びつきがあるだろうか。

これは甘えなのだとこつ自覚はある。どう転ぶかわからない変化を起こすくらいなら、今ままのふたりでいたい。そうすれば、俺は何もおそれずに、彼女の隣にいられる。

臆病だと思う。卑怯だとも思つ。だが俺はまだ、このぬるま湯のような幸福に浸かっていたい。

「おじこひ。早くしゃがれ」

「へいへい」

「返事に真心がこもつてない！」

「つて！ 枕投げるな！」

ドアを盾にベッドからの砲撃を回避する。「とつとと持つてこい！」 という彼女の声を背に、俺はこみ上げてくる笑いをひつそりと噛み殺しながら、階段を駆け下りた。

未来のことはわからないが。
今はまだ、彼女は俺だけの女王様だ。

Act・2 慢病者の秘密（前編）

いわゆる発端編。

Act・2 憶病者の秘密

かつといの秘密は、だれにも言わずに墓まで持つていくに違ない。い。

これは幸運というべきか、それとも不運といつべきか。

俺はドアを開けた姿勢のまま、目の前の光景を喜ぶべきか嘆くべきか悩んでいた。

いつものように押しかけてきた女王様の仰せに従い、ふたり分の麦茶とポテトチップスを持って階下から戻ってきてみれば、彼女はベッドの上で気持ちよさげに熟睡していた。思いきり抱きしめているのは、俺が愛用している抱き枕だ。

一瞬、据え膳だとか、棚からぼた餅なんていつ言葉が脳裏をよぎる。

「……いやいや、そうじやねえだら」

いくらハイハイもできなかつた頃からのつき合いである幼なじみだからといって、普通健全な男子高校生の部屋で寝るだらうか。しかもベッドの上で。

なんだかいたまれなくなつて、俺は無防備すぎる彼女の寝顔から視線を逸らした。

とりあえず足音を忍ばせて部屋の中に入り、そつとドアを閉める。女王様ご所望の品が載つた盆を座卓の上に置くと、重いため息がこぼれた。

「なめてんのか、ホントに……」

ある意味、これは彼女が俺が信頼してくれているという証だ。だが同時に、俺は彼女にとって異性ではないといつ、無情な宣告でもあつた。

素直に嬉しいとは思えない。むしろ、冗談じゃねえと吐き捨てるやつだ。

苛立ちのよつた、虚しさのよつた、苦い感情がこみ上げてくる。

俺はちらりと、眠る彼女を一瞥した。

腕の中に抱えこんだ抱き枕に頬を寄せ、しつかりと瞼を閉ざしている。微かに聞こえてくるのは規則正しい寝息。目を覚ます気配はあるでない。

……いつたい、どうすればいいのだろうか。

いや、起こすべきなのだろう。そうしなければならないと頭ではわかっている。しかし 実行できそうに、ない。

俺はもう一度ため息をつくと、そろりと立ち上がった。できるだけ静かにベッドへ近づく。

スカートから覗く白い膝が目に飛びこんできた瞬間、思わず泣きたくなつた。どうしてよつよつてスカートなのだ。「あともう少し！」なんて思う余裕は、俺にはない。

抱き枕をぎゅっと抱きしめている、シャツの七分袖から伸びた細い腕。彼女に頬を寄せられている抱き枕が羨ましいとか考えてしまう俺は、もう駄目かもしれない。

ベッドに膝をかけると、スプリングが小さく軋んだ。ひやりとしたが、彼女は睫毛の一本すら動かさない。俺は薄い肩の横に片手をつき、身をかがめた。

長い髪は首の後ろへ落ち、滑らかな頬、すつきりとした顎の線が顎になつていて。生白い肌の上に俺の影が落ちた。

けれど、そのまま覆い被さることはできなかつた。

彼女は寝入つていて。こんなに近くにいても気づかない。

「……馬鹿にしてんのか？」

いや、違う。

無意識にこぼした恨めしげな咳きこ、自嘲がこみ上げてきた。

彼女は何も知らない。恨むとすれば、幼なじみといつ曖昧な関係に甘んじてゐる俺自身だ。

だから俺がどんなに苦虫を噛み潰そうが、彼女は関係ない。そもそもの原因を作ったのは、他ならぬ俺だから。

俺は中途半端に身をかがめたまま、唇を噛んだ。

ときどきわからなくなる。俺はビッグしたいのか。今まま、幼なじみという確固たるポジションを保つていいのか。それとも、一か八かの勝負に出たいのか。

彼女に手を伸ばしても、拒絶されたことが怖い。だつたら幼なじみのままでいい。そう決めたはずなのに、歯痒くてたまらなくなる。

わがままな女王様。だがいつか、その存在は俺だけのものではなくなる。おそらく、そう遠くはない未来に。

近くて、こんなにも遠い。胸を搔きむしりたくなるような焦燥感が、じりじりと心を焼いた。

それでもなお、……手を伸ばせない。

「なっかけねえなあ、俺」

本当に情けない。あまりにも情けなさすぎて、乾いた笑いが洩れだ。

ああ、けれど。

たぶん潮時なのだ。あやふやな安心感で自分を「まかすこと」は、もうできない。漠然と、そんな予感があった。

ならば、残された選択肢はひとつだけ。

足りないのは、手を伸ばすための勇気。

俺は眠る彼女を見つめた。翳りのない、安心しきった寝顔。薄く開きかけた唇に視線が留まる。

どうせ奪うのなら、正々堂々と勝負したらどうだ。

だが今の俺には、こんな姑息な手段が精いっぱいだ。寝こみを襲うなんて最低だけれど、最後のあと一歩を埋めるためには、ビッグでも必要に思えてしょうがなかった。

彼女には秘密だ。

いや、きっとこの秘密は、だれにも言わずに墓まで持つていこう。

違いない。

女王様が目覚めないよう祈りながら、俺は残りの距離を静かに詰めた。

Act・3 青い海と試練の夏（1）（前書き）

波瀾万丈（かもしけない）決着編。

Act・3 青い海と試練の夏（1）

01 試練の夏、来りて

夏は、試練の季節。

そんなことを言つたのは、いつたいだれだったろうか。今となっては思い出せないが、聞いた瞬間、全力で頷きたいほど納得したことは憶えている。

そう。夏は試練の季節だ。

男にとつて。

「青い空、青い海……そして白い砂浜で微笑む水着のエンジエルたちー！」

ガツッホーズとともに、香坂京平いしかわ きょうへいが焦げつくような陽射しにも負けないほど熱い歓声を上げた。その眦にはうつすらと涙が滲んでいる。

馬鹿だ。

「来た来た来たよ、夏休みー！　海水浴ー！　おれはこんな熱い日々を待つてたんだあ！」

「遊びにじゃなくてバイトに来たんだけどな」

灼熱の太陽に向かつて吠える友人に、俺は空気の入つていない浮き輪の束を押しつけた。

「ほら、空気入れて並べてーーい。ちゃんと大きさ別にだぞ」

「……おい、本原もとはら」

香坂は拳を下ろすと、呪い殺さんばかりの目でこちらを見た。

「お～ま～え～はあつ！　せっかく盛りに盛り上がったテンションを急降下させるようなことをお～！」

「事実を言つたまでだろ。もうすぐ昼だから、それまでに終わらせとけよ」

「あーもー、この本念仁が！　はいはい、わかりましたよ～。働きやいいんだひ、働きやあ」

「もうそつ。あ、ついでにそこにあるビーチボールとかポートもよろしく」

「何気にパシリやがつてるな、こんちくしょつ～」

「うがー！　つと香坂はしばらく頭を搔きむしっていたが、結局がつくりと頃うなだ垂れて浮き輪の束を受け取つた。

「ああ……グッバイ、おれのマーメイドたち……」

先ほどまでの暑苦しさが嘘のよくな、生氣の薄い顔でぶつぶつと呴いている。俺はため息をつくと、小柄なためにやや低い位置にいる香坂の肩を叩いた。

「まあ、元気出せ。接客中にいやつていうほど天使だか人魚だかの水着姿を拝めるし、仕事が終われば声もかけ放題だろ」「マジですか！？」

たちまち香坂の顔に生氣がみなぎる。器用だよなあ、と呆れながら、俺は期待に輝く目に頷いた。

「ああ」

たぶん。

「によっしゃあ！　そうと来ればじょんじょん働いてやるぜー！」

待つてろよ、渚のフェアリーたち！」

鼻息荒く、香坂は再び拳を突き上げる。……こいつ、本当に馬鹿だ。

「元気だなあ、香坂」

屋外の客席用のビーチパラサルを広げていた富野照史みやの てるふみが苦笑した。

俺は肩を竦めると、もうひとりの友人の許へ向かった。

「いつものことだら。……なんか手伝うことあるか？」

「いや、これでちょうど終わりだ」

ぱんつと張ったビーチパラサルをテープルの中央に空いた穴に差し、富野はひらひらと両手を振った。

「お疲れさん」

「おまえもな。これから匂だっけ？」

「ああ。飯は手が空いてるときには、各自適当に食べうつてさ」

「つづわ、マジかよ」

Tシャツの胸元をつまんでぱたぱたと扇いでいた富野は、顔をしかめた。

「超いい加減だな」

「まあ、しようがないだろ。海の家のバイトなんて、どうもそんなもんだ」

俺は額に浮かんだ汗を手の甲で拭つた。刺すような熱氣に体中の水分が蒸発してしまった。恨めしいくらい見事に晴れ上がった空を仰げば、その真ん中で太陽がきらきらと輝いている。

視線を下ろせば、視界に飛びこんでくるのは果てしなく広がる真夏の海。波頭のきらめく遙か彼方、まっすぐに伸びる水平線の上に朧な船影が見える。砂浜は海水浴客でじつた返し、ビーチパラサルや人々の水着の色が目に痛いほど鮮やかだ。

一学期を終え、ようやく迎えた夏休み。俺は友人たちとともに、海の家へアルバイトにやってきていた。期間は一週間。海の家と経営者が同じ民宿で泊まつこみだ。ハードだが、それなりに報酬はいい。

文句はない。あるひとつを除けば。

「そういや、神崎たちは？」

ふと富野の口から飛び出した名前に、思わず心臓が跳ね上がった。

「あ、ああ。店舗内で片づけしてる」

激しくなりそうになる鼓動を鎮めながら、できるだけ平然と答える。富野は特に気にするでもなく、「そつか」と呟いた。

俺はこいつそりとため息を洩らした。

そう、文句はない。ただひとつ　彼女がアルバイトのメンバーに入っているということを除いて。

以前だつたら素直に喜べたのだろうが、今はその反対だ。香坂ではないが、思わず頭を搔きむしりながら唸りたい気分だ。なぜなら。

「男子い、そつちは終わつたあ？」

ひと際明るい声とともに、店の中からこちらへやつてくる姿があつた。女子メンバーのひとりである水沢明音みずさわあかねと、……彼女だ。他のメンバーと似たり寄つたりの、白い半袖のパークターに灰色のショートパンツ、明るい水色のビーチサンダルという出立ち。長い髪はひとつに結い上げられ、不揃いな毛先が項うなじのあたりで揺れていった。

彼女は平均よりもやや細めの体型をしていて、そのせいか手足がすらりと長く見える。しなやかに伸びた四肢は、思わずハツとするほど白かった。

俺は一瞬、彼女の肌に釘づけになり、慌てて目を逸らした。遠慮なく突き刺さつてくる鋭い視線を感じる。

睨んでいる。絶対睨んでいる。氷のように冷ややかな怒氣がひしひしと伝わってくる。

逃げたい。

もうアルバイトなんぞ放り出して、今すぐここから逃亡したい。情けないと笑われようが、それが偽らざる俺の本音だった。

しかし。

現実はそう甘くない。事情を知らない友人たちの手前、仕事を押しつけてひとり逃げ帰ることなんてできない。それに、彼女は決して逃げることを許さないだろう。本當なら、アルバイトのメンバーは俺を含めた男子だけだったのに、俺が海の家のアルバイトに行くと聞くなり、わざわざ男子と同数の女子に声をかけて参加したのだから。用意周到といふか、身の危険を感じるのは氣のせい……ではないはずだ。

そもそもどうじてこんなことになつたのかといえば 完全な自業自得だ。

俺は幼なじみである彼女に、まといわゆる片想いというものをしていた。そしてつい最近、俺の気持ちが彼女にバレたのである。

……寝こみに口づけよつとしたところで彼女が目覚めるとこり、最低最悪な形で。

それ以来、俺は彼女を避けている。

わかつていて、自分でも悲しくなるほどのヘタレだと思う。今までさんざん幼なじみという関係に甘んじていたくせに、勝手に焦つて自滅するという、どうしようもない駄目っぷりだ。彼女に非はないのに、まるで自分が被害者のように逃げ回っている。

吐き気がするくらい、俺は臆病で卑怯だ。

それでも。

どうしても、彼女と向き合ひの勇氣を持てない。彼女の瞳をまつすぐを見ることができない。

そしてついに、彼女が動き出した。

逃げられない。

だつたら。

「はじめ」

驚くほど近くで響いた彼女の声に、俺は思わず息を呑んだ。

「えつ、な……」

「なあにぼさつとしてんのよ。さつきの話聞いてなかつたの？ あたしとあんたは売り歩き！ ほら、行くわよ」

彼女はじとりと大きな目を半眼にすると、俺の腕を両手でしつかりと掴んだ。俺よりずっと握力は弱いはずなのに、俺は彼女を振り払うことができず、そのまま引きずられるように歩き出した。

「おい、ちょつ……苑香！」

「今日ものすつ“ごく暑いんだから。さつさと売つて戻るわよ

どんどん先を行く彼女は俺の言葉を遮るようにまくしたてると、ちらりとこちらを一瞥した。逸らすこともできず、深みのある瞳と

まともにぶつかる。

その瞬間。

彼女はすうっと目を細め、うつすらと、けれど確かに笑った。まなざしの奥に氷片を秘めたような、獲物を追い詰める獰猛な獣を思わせる笑み。

逃がさないわよと、とぎきり甘く、毒々しい声でささやかれた気がした。

抜ける。

今は激しく太陽が燃え盛る季節だというのに、背筋を寒気が駆け

俺に残された選択肢は、彼女に捕えられること、ただひとつ。

俺の、短くて長い、試練の夏がはじまるつとしていた。

Act・3 青い海と試練の夏（2）

02 少年たちの夜

長い、本当に長い一日を終えて。

宿泊先の民宿に戻った俺たちは、風呂で汗を流し、素朴ながらも海の幸がふんだんに使われた夕食を堪能したあと、早々に男女別にあてがわれた部屋へ引っこんだ。明日に備えて、あとは寝るだけである。夜更かしできるほどの元気は残っていなかつた。

俺としては非常にありがたかった。彼女と一緒にいるのは、泣きたくなるほどいたまれなかつたのだ。せっかくの夕食も味わうどころではなかつた。部屋へ戻るとき、振り向いたら瞬殺されそうな視線に背中を抉られたような 気のせいではないだろ。正直、明日が怖い。

「も、もう駄目だ……」

部屋に着くなり、香坂は精も根も津が残らないほど搾り取られたよつな声で呟くと、そのまま畳の上にくずおれた。

「おい香坂、寝るなら自分の布団敷いてから寝ろよ」

俯せのまま動こうとしない体を爪先でつづくと、死んだ魚のようにな虛ろな目が見上げてくる。

「……無理、絶つ対無理。今そんな重労働したら、おれ死んじゃう」「まったく重労働じやねえし、布団敷ぐだけで死ぬようなやつがいるか」

「いーるーのお！ ここにいーるーのお！ なんなおまえ、そんなにおれを過労死させたいわけ！？」

「だから過労死するわけねえだろ！ 駄々こねてねえで、さつと起きろ！」

「本原の鬼い！ サド！ 友人虐待で訴えてやるう…」

「そんな虐待の分類あるかっ！」

本気で泣き叫ぶ香坂。小学五年生の彼女の弟だつて、こんな馬鹿らしさとこうか阿保らしい醜態は見せないぞ……？

「なんだあ、どひした？」

自分の布団を敷き終えた富野がやつてくると、すかさず香坂が泣きつぐ。

「富野おつ、ヘルプミー！ 本原がいじめるんですけど…」

「そなのか？ 駄目だろ、本原」

「いや、明らかにいじめてねえし。こいつが布団敷かねえって駄々こねてんだよ」

俺の反論に、富野は腕を組んだ。

野球部でキャッチャーを務める富野は、香坂とは対照的に大柄で実年齢よりも老けて見られやすく、じついう親父くさい仕種がよく似合つ。

「まあ、かなり仕事きつかつたしな。富野は文化部だし、へろへろになつてもしようがねえだろ。俺が代わりに敷いてやるよ」

「マジで！？ やつたあ、さつすが富野！ 頼れるみんなの兄貴！」

俺は思わずよろめきそうになつた。

「おいこら待て、富野。甘やかすな！ こいつはおまえの弟じゃなくて同級生なんだぞ！」

「まあ似たようなもんだろ」

「似てねえよ！ しかも香坂のほうが誕生日早かつたじゃねえか！」

「そんな細かいこと気にすんなつて」

あつはつはと豪快に笑う友人に、俺はこめかみに痛みを覚えた。というか、たかが布団を敷く敷かないということに何を大騒ぎしているのだろう……。

虚しさに黄眞れでいると、どいかのんびりとした声がかかつた。

「僕も本原の意見に賛成かなあ」

部屋の隅を陣取るように敷かれた布団の上に胡座をかき、文庫本

を読んでいた長谷悠也^{はせ ゆうや}が顔を上げて、にっこりと笑つた。

「ほら、テレビの子育て特集とかで、甘やかしすぎると将来自立できなくなるっていうじゃない。優しさも大切だけど、敢えて厳しく突き放すのも愛だと思うよ？」『飴と鞭』って言葉もあるしね」

正論だが、ところどころにツツコみたい箇所があるのでわざとに違いない。しかし期待に添えるだけの余力はなかつたので、俺は黙つていた。

長谷の言葉に富野は田を瞬かせると、ふむ、ともう一度思案した。「言われてみればそうかもな……うん、そうだな。手を出したくても我慢して見守ることも大事だよな」

「ええ！ ちょっと、そんなあつたり！？」

驚愕に田を剥いた香坂の肩を叩き、富野は父性溢れる笑みを浮かべた。

「がんばれ、香坂。俺はおまえならやり遂げるつて信じてるぞ！」

「…………マジっすか」

いつの間にかスポーツ根漫画のワン・シーンのよつなやりとりをしているふたりからそそくさと離れ、俺は自分のスペースに布団を敷きはじめた。実は長谷の隣だつたりする。

「さつきの、本原なら冴え渡るツツコミを入れてくれると思ったんだけどなあ」

つまりなそうな視線を向けてきた友人を、俺は力なく睨み返した。「いちいち確信犯的なボケにまでつき合つてられつか……」

「友人甲斐のないやつだなあ」

くすくすと心底おかしそうに笑われても真剣味がない。

俺は黙々と布団を敷き終え、待望のシーツの海にダイブした。優しく体を受け止めてくれるやわらかい感覚に、全身の筋肉が一瞬でゆるむ。

「うお～……なんかもう天国だ……」

心地よい眠りに引きこまれた意識を、しかし笑みを含んだ長谷の声が容赦なく掬い上げた。

「だいぶお疲れみたいだねえ。まあ、あれだけ殺氣をビシバシ飛ばされれば神経もすり減るよねえ」

頭から冷水をかけられたようだった。

かばつと顔を上げると、爽やかでありながら腹黒さを感じずにはいられない笑顔の長谷と田が合った。

「で、神崎女史と何があつたの？」

肌の白さとは対照的な黒い前髪の奥から、同色の双眸が見つめてくる。心の奥底まで見透かされそうなまなざしは、彼の恋人のものとよく似ている。

「おかしいなあとは思つてたんだよねえ。最初は僕らだけで来るはずだったのに、突然神崎女史たちもだなんて。まあ、かりん 果林と一緒にいられるから不満なんてないんだけどさ」

さりげなくのろけながら、長谷はじわじわと追い詰めてくる。瞳孔と虹彩の区別がつかない瞳をよきるのは、愉悦の光。

絶対おもぢやにされていい……。

憤りたいような嘆きたいような、なんとも微妙な心境になり、俺は押し黙つた。今更ああだこうだと騒いだとこころで、長谷の性格が変わるものではない。用意周到に張りめぐらされた蜘蛛の巣のごとく、この友人から逃げることなど不可能なのだ。おとなしく糸に巻かれ、妥協しながらつき合つていくしかない。

人生、あきらめが肝心である。

俺は、深く長く重いため息を吐き出した。

まったく、彼女といい友人たちといい、どうしてこう俺の周囲には灰汁の強い人間が多いのか。そしてなぜ、俺はそんな彼らとつき合つているのだろうか。

類は友を呼ぶ？ いやいや、俺は平々凡々な一般人だ。そのはずだ。

後ろのほうでは、富野と香坂がまだスボ根漫画を演じているようだ。

「無理だ……つ、おれには無理なんだ！」

「逃げるな！ つらくとも苦しくても、勝利はその先にしかないんだ！」

俺の本当の休息は、まだまだ先のようだった。

Act・3 青い海と試練の夏（3）

03 先手、女王様

女はこわい。

怖いし、こわ強い。

ということを、俺は痛感していた。

昨日に続いて本日も快晴、絶好の海水浴日和だ。つまり、海の家にとつては他でもない稼ぎ時。少しでもたくさんの客を呼びこもうと、まぶしい陽射しの照りつける砂浜では熾烈な戦いがくり広げられていた。

別名、女の意地と矜持のぶつかり合い。

「ねえねえ、そこのお兄さんたちい。ちょっと寄つてかなあい？」

「うちのお店に来てよつ、他よりもっとといいサービスあるからさー」
弾むような声を上げているのは、色とりどりの水着を身に纏つた少女たち。輝くような夏空の下、惜しげもなく晒された瑞々しい肌に、行き交う海水浴客（特に若い男）が目を奪われている。

砂浜に軒を連ねる海の家は決して少なくない。それはそのまま、客引きの人数に比例する。大して広くない縄張りの限られた範囲の中、少女たちは凄味さえ感じられるような勢いで声を張り上げ、笑顔を振り撒いていた。縄張りの重なる境界線の周辺は気温が鰻うなぎのぼりだ。正直少し……いや、かなり近寄りがたい。

俺たちが働く海の家も、例に漏れず参戦中だ。他のアルバイトの女の子とともに、俺の同級生たち もちろん、彼女も。

「休憩ならどうぞこちらへー。シャワー・更衣室、完備してます」

昨日と同じポニー・テールにまとめられた髪。線の細い肢体を包むのは、淡いブルーの。

…………どうしてビキーなんだよッ！

俺は思わず悶絶したくなつた。よりもよつて、ビキー。
まだショートパンツタイプだからマシなかもしれないが、はたしてそれがいつたいなんのフォローになるというのか。その威力は核爆発にも等しいといわれる海辺の最終兵器だ。

「どうしたの、本原。今にも悶え死にしそうな顔して」

一緒に貸出し用のボートを壁に立てかけていた長谷が、不思議そうに目を瞬かせた。俺の視線の先を追いかけ、ああ、と納得したようにはぐく。

「さすがだねえ、神崎女史。道行く男たちの目が釘づけだよ。あんまり気づいてないみたいだけど」

長谷の言つとおり、彼女はかなり注目の的になつていた。本人にはその自覚があるようでいて、実のところあまりない。

「……たち悪すぎだら」

俺の呻きに、長谷の含み笑いが重なつた。

「自業自得じやない？ あれは彼女なりの、きみへの『挑発』なんだろうし」

鋭い指摘に、俺はぐつと言葉を詰まらせた。

昨夜の悪夢が甦る。言葉の拷問によつて、彼女がアルバイトに急遽参加した経緯を吐かされたのだ。俺の自由を聞き終えた長谷の一聲は、「本原つて本当にヘタレだねえ」だった。余計なお世話だ。そつと彼女に視線を戻す。惚れた欲目を入れたとしても 悔しいほどに、似合っていた。

……頭が沸騰しそうだ。めまいが起こりそうなほどの熱を、途端に意識する。

火を吹きそうな顔を押さえながら視線を逸らすと、生ぬるい笑みを浮かべる長谷と目が合つた。

「……なんだよ」

「いやあ、初々しいつていうか純情つていうか……本原つてかわいいよねえ」

嘆息するような聲音に鳥肌が立つた。

「なつ、何気持ち悪いこと言つてんだよー!」

「失礼だなあ、褒めたんだよ? 別に変な意味はないしね。なんて言つたか、傍から見てると思わず顔がにやけちゃうよつた……」こう甘酸っぱさが、ね

「ね、じゃねえよ。つまり俺の懊惱を見て楽しんでるってことだろうが」

「いやだなあ。草葉の陰からそつと見守つてゐつて言つてよ」

「おまえまだピンピンに生きてるだろー?」

ああもう、なぜこの友人との会話はこんなにも疲れるのだろう。げつそりとした氣分でため息をつくと、不意に長谷が表情を改めた。

心の最奥を隠すベールを容赦なく切り裂いてしまった。その鋭いまなざしに、心臓が震え上がる。

「でもさ、本原。いつたいいつまで逃げ続けるの?」

いつもと変わらない、だが氷の刃のような声がざつくりと胸を抉つた。

いつもときの長谷は、本当に冷酷だ。たとえ相手がだれであろうと決して手を抜かない。

真っ黒なガラス玉を思わせる瞳から田を逸らすことも、何か言い返すこともできなかつた。

「逃げて逃げて逃げて　ずっとそのままいたら、いつか追いかけてもらえないくなるよ?」

ツイ、と長谷の視線が動く。

透明な糸に引っ張られるように、同じ方向へ振り返る。瞳がたどり着いた先の光景に、喉の奥から叫びがせり上がってきた。

唇を噛みしめ、必死に抑えこむ。

彼女が　笑っていた。

その隣にいるのは、見覚えのない若い男。おそらく大学生ぐらいだろう。さつぱりとした黒髪、癖のない顔立ち。親しげでありながら

ら粘着質なしつこさを感じさせない笑顔を、他でもない彼女に向いている。

ナンパといつこはいやらしさのない、爽やかな空気がふたりを包んでいた。

胸の奥がじりじりと焦げつく。肺を満たしていくきなくさせに、俺は喘ぐように息を洩らした。

あんなにも無防備な彼女が放つておかれのはずがない。
わかつていた、つもりだつた。

つもりだけで、ちつとも理解していなかつた。

あのとき。眠る彼女を前に抱いた焦燥よりも、もつと荒々しい感情が咆哮を上げる。

食い入るような俺の視線に気づいたのか、ふと彼女の目がこちらを向いた。

小さく瞪られる瞳。そして。

白と黒に彩られた盤上に、彼女が先の一手を打つ音が聞こえた気がした。

試練ゲームは、すでにはじまっていた。

Act・3 青い海と試練の夏（4）

04 想いはもつれ絡まりて

自分に耳があることをこんなにも苦痛に感じたのは、生まれてはじめてだ。

あるいは、だれかの口を一度と開かな「ようにしてやりたい」と思つたのも。

「それでそれで？ なんていうんだって？」

彼女の隣に座つた水沢が、興奮した様子で身を乗り出した。短く切り揃えたショートヘアに、こんがりと小麦色に焼けた肌。男の子めいた外見に似合はず、この手の話が大好物だ。

「高見沢さん。Ｋ大の一年生だつて」

いきさか鼻息の荒い水沢に対して、彼女は落ち着いている……と
いうか、まるで他人事のように素つ気なかつた。

「Ｋ大！？ 超頭いいとこじやん！ さつすが苑ちゃん、捕まえる
魚も大物だあつ」

「顔もなかなかカッコよかつたよね。チャラチャラしてなくて、感じ
じのよさそうな人だつた」

水沢の向かい側で、まつした松下果林がふんわりと微笑む。たとえるなら綿菓子やマシユマロのような、気が抜けるほどやわらかい笑顔。だが、どんな修羅場でも同じ表情を浮かべられるのだから、おそらくいことこのうえない。その視線が一瞬こちらに動いたことに気づき、俺は無理やり青汁を飲まされた気分になつた。

「だけど女慣れしてそうじやなかつたか？ ああいつタイプは結構遊んでると思うぞ」

松下の隣で頬杖をつき、聞き役に徹していた丈部藍たけべ あいが涼しげな眉

間を曇らせた。途端に斜向かいから反論が上がる。

「んもー、わかつてないなあ藍ちゃんは！ 逆にそこがいいんだよ。格好ばっかりつけたがって中身がない男よりずうっとマシー！」

「遊び人もどうかと思うが……」

女三人寄れば姦しいとはうまく言つたものだが、こちらは四人なうえにひとりでふたり分しゃべる水沢がいるので、一種の騒音と化していた。女という生きものの辞書に、沈黙の一文字はないのだろうか。

「まあまあ、選ぶのは苑ちゃんだし。で、苑ちゃんはどうするの？」

「明日一緒に出かけないかって訊かれた」

「おおー、いきなりデートですか！」

「……毎度のことだが、明音。ちょっとテンションを下げる」

「藍ちゃんが低すぎると困るなあ！ ねつ、果林？」

「わたしに同意を求められても困るなあ」

「ひど！ 何気にひど！」

「……ないのだろうな。

俺は深々とため息をついた。向かい側の宮野は苦笑を滲ませ、そこの隣では長谷が悠々と読書に耽っている。嫌味さえ感じる余裕つくりだ。

夕食が終わっているからいいものの、食事中までこれだったたら心底うんざりしだろう。ハードな仕事に慣れてきたからか、隣のテーブルの面々は俺たち以上に元気があり余っているようだった。

「…………ああ～つ、もー、うるせえッ！」

俺の隣でテーブルに突つ伏していた香坂が、唐突に吠えた。椅子を蹴倒す勢いで立ち上ると、充血氣味の目でギッと女子を 水沢を睨みつけた。

「人が珍しく感傷に浸つてるので霧囲気ぶち壊しやがって……

特にそこー。おまえうぜえんだよ、ハイテンション女ー！」

「なんですってえ！？ あんたに言われたくないわよ、童顔女顔ー！」

指差された水沢も、がたんっと椅子を鳴らしながら立ち上がる。

激しい火花を散らしながら睨み合つたり。いつものことだ。

「別におまえが声かけられたわけじゃねえだろうが！　自分のこと

みたいに騒いでんじやねえよ、恥つずかしいやつ！」

「あんたこそハツ当たりしてんじやないわよ… センチメンタルぶ

つて、ナンパがうまくいかなかつただけじゃない。馬つ鹿みたい！」

「な、なんでおまえ知つてんだよ！」

「あんたのやつてることなんて脳味噌使わなくつたってわかるわよ、

この単細胞！」

女子のおしゃべり以上のやかましさに、俺はため息をつく氣力すらなくなつた。ぎゃこぎゃいと小学生レベルの口喧嘩をくり広げる彼らは、本当に俺と同じ年なのだろうか。

つき合つていられるか。

今この瞬間が、くだらないと言つ価値もないほどくだらない時間に思え、俺は椅子を引いた。口論に熱中している香坂たち以外の視線が集まる。

「本原？」

富野が不思議そうに瞬きをした。長谷は文庫本から顔を上げ、うつそりと田を細めた。

「……先、部屋戻るわ」

すべてを見透かしているだらう友人のまなざしさえ煩わしかつた。俺は富野の返事を待たずに、さっさと部屋をあとにする。

腹の底でぐらぐらと感情が煮え立つてゐるのに、それを冷ややかに見下ろしててゐる自分がいた。だれかを傷つてしまいたいような苛立ちと、もうどうにでもなれと呴く疲労感がずつしりと胸の内を詰まらせていた。

もつ何も聞きたくなかった。耳を塞いで、喉を切り取つてやりたかつた。

そう考へることすら馬鹿馬鹿しいと笑つてしまひたかつた。

だから、いやといつほど聞き慣れた足音が追いかけてきたとき、俺はいつそ彼女を殺してしまおうかと思つた。

「はじめ」

いつになく平坦な声に、心はいつそう荒み、冷たくなっていく。
少しでもはしゃいだ素振りを見せたりすれば、こんなに苦しくなかつたのに。

「……なんだよ」

振り返ると、彼女は無表情だった。色の深い双眸を細め、どうじよつかとひとりごちる。

「どうすればいいと思つ?」

あくまで淡々と。だがその裏に隠された計算高い期待に、本気で彼女を殺したくなつた。

最低最悪な女だ。

どうしてこんなやつを好きになつてしまつたんだろうと思つたがら、俺は答えた。

「別に」

たとえば。

ここで行くなと言えば、きっと試練ゲームはあっけなく終了しちだう。

彼女の勝利という形で。

そんなの「ごめんだ。

追い詰められた俺の思考は麻痺していた。

「行きたかったら、行けばいいんじゃねえの。俺には関係ねえし

きっと後悔するに決まつている。

それでも、このときの俺は、放り出して逃げることを選んだ。敵の思つどおりになるなんてまっぴらだった。

「…………あつ、そつ」

彼女の声音がすっと低くなる。憤りと落胆がない混ぜになつた、詰るような色が見つめてくる瞳に一瞬浮かんだ。

俺はそれを投げやりに受け止めた。

試合は、混戦へ突入しようとしていた。

Act・3 青い海と試練の夏（5）

05 結び目をほざくとわ

覆水盆に返らず。こぼれ落ちた水のように、一度失われたものは決して元に戻らない。

その事実に思い至つたとき、俺は壁に頭突きをかましたくなつた。「女子のおしゃべり攻撃に煽られてイライラしまくった結果、**自棄**になつてせつかくの降伏の機会を逃した」と

テーブルの向こうで頬杖をついた長谷は、呆れを通り越して哀れむようなまなざしを向けてきた。

「なんていうか……本原つて」

「頼むから言わないでくれ。そしてそんな目で見ないでくれ」「この世から消えてなくなりたい気分とは、こんな感じだろうが。俺は額をテーブルにくつつけながら考えた。

ひと晩経つて、頭が熱いような冷めているようなおかしな状態が落ち着いた途端、俺は昨夜の自分の行動に沈没した。

後悔なんてものではない。もしもタイムマシンに乗れるなら、三回回つてワンと吠えたつていい。ドラえもん！……なんていう現実逃避に走りとなるほど、マリアナ海溝よりも深く落ちこんだ。昼時のラッシュを過ぎ、海の家は束の間の平穀を味わっていた。俺と長谷は、富野や香坂と交代して休憩に入り、店の隅で遅い昼食をとつていた。

「まあ、女子もちょっとやりすぎたかもねえ。あれは素で楽しんでたし」

「特におまえのカノジョとかな……」

松下経由の長谷の情報によると、昨夜の女子のおしゃべりは、彼

女の依頼による俺への精神攻撃だつたらしい。道理で妙なしつゝを感じたわけだ……。

「果林のいいところは、いつでもビックリでも自然体でいられるところだよ?」

「さりげなくのろけてんじゃねえよ。時と場合によるだらうが。少しはＴＰＯをわきまえる!」

「大丈夫。なぜか僕らがわきまえる前に、周りが僕らに会わせてくれるから」

「……おまえらって、ホント似た者カップルだよな」

「そう? 嬉しいなあ」

「褒めてねえよ!」

「ああ、もう。こんなときにもツッコまではいられない自分の性が悲しい。」

再びテーブルに沈みかけた俺を、ほんの少し口調の変わった長谷の声が引っ張り上げた。

「でもさ、本原たちも充分似た者同士だよね」

あの心臓の裏まで射抜くような目とかち合つ。

「……どこが

「意地つ張り」

ふふ、と長谷は吐息のような笑い声を洩らした。

「きみも神崎女史も、相当な意地つ張りだよね。負けず嫌いっていうか、傍から見るとこっちが苛つくくらい頑なになつてる」

柔軟な笑顔で吐かれた台詞は、長谷のひんやりとした怒りを滲ませていた。

「何をここまで抵抗するの? タチと捕まってくつつけばいいのに。今はまだ笑つて傍観してられるけど、そのうちみんな怒り出すよ?」

もう怒つてるじゃねえか、とは言えず、俺は口をつぐんだ。不機嫌な長谷に図星を指すのは、火に油を注ぐことに等しい。『まかす』ように焼きそばをつづくしかなかつた。

「今日だつて、そんなに落ちこむくらになら止めればよかつたのに」
そう。

勝手にすればいいという俺の答えどおり、彼女は例の大学生と出かけていた。休憩に入るや否や、あの水着姿のままで。すれ違い様に向けられた視線は、絶対零度を下回っていた。

「神崎女史もムキになつて、ちょっとあれは危ないよねえ。どうするの？」

「……わかんねえ」

俺は箸を紙皿に置き、拳を握りしめた。

「どうすればいいか、わかんねえんだ。追いかけられると逃げたくなるし、追いかけてもらえないくなるつて考えたら、怖い。だれかに持つてかかるなんて我慢できねえ。……だけど」

「手に入れられるかも、なんて考えられない？」

大袈裟なくらい喉が鳴った。

「本原はさ、最初からあきらめて　ううん、満足してたよね。神崎女史のことが好きでも、追いかけてはなかつた。だつて隣にいられたんだから、そんな必要なかつたんだ」

でも、と長谷は続けた。

「それは幼なじみつていう前提があつたからこそで、その前提が崩れてようやくきみは焦り出した。それでまあ、あんな失態をしちやつたわけだけど」

「……笑うなよ」

「『めん』『めん』。それで逃げ出して、ところがどつこい相手は避けるどころか追いかけてきた。自分の完全な片想い、神崎女史にとつて自分は幼なじみでしかないと思つてたきみには、まさに寝耳に水、鳩に豆鉄砲だつたわけだ」

何か少し違わないだろうか？

俺の微かな違和感を置き去りにして、長谷はさらりと、まるで明日の天気でも話すかのように最終宣告を下した。

「つまり　本原は、神崎女史の気持ちを信じられないんだがう？」

絶句、というものを俺ははじめて体験した。

俺が、彼女の想いを。彼女を。

信じられない？

「本原にとって、両想いなんて絶対ありえないことだから信じられないんだ。きみは神崎女史の隣にいたいけど、彼女の気持ちを信じられない矛盾を抱えて苦しい。これからもふたりが一緒にいるためには、恋人つていう関係じやなきやいけないから」

長谷は凧いた水面のような表情で頬杖を外し、組んだ両手を口元に当てた。

……俺は。

俺にとって彼女は、だれよりも近くにいる、いてほしいと望む存在だ。

少しでもたくさんの時間を共有したい。笑顔も涙も、すべて知りたい。知つてほしい。

裏切りだとか不信感だとか、そういう次元からこの世で一番遠いはずの彼女を、俺が。

俺が、信じられない、なんて。

「そんなの……最低だ」

こぼれ落ちた咳きは、今にも消えそうなほど震えていた。
何が最低最悪の女だ。

俺が、俺こそが最低最悪の男だ。

吐き気がした。

嘘だと笑い飛ばせたらどんなにいいだろう。だが長谷の言葉はどこまでも真実で、俺は打ちのめされるしかなかつた。

死ねばいい。

死んでしまえばいい、俺なんて。

闇のような絶望に囚われかけた思考を、ふっと、長谷の声が掬い上げた。

「……所詮、部外者の僕が判断すべきじゃないけど

彼の顔は厳しく、けれど 優しかった。

「まだ間に合うなら、きみは最低にはならないと思う」

長谷は本当に容赦がない。相手がどんなに弱つていようと、躊躇

なく鋭い真実の刃を突き立てる。逃げるな、目を逸らすなど。

それが相手を思つているからこそその行いだと、俺は知つてゐる。世渡り上手のようでいて、本当はとても不器用なこの友人の心根を、知つてゐる。

「すべては本原と神崎女史次第だ。ねえ、本原」

もつれて絡まり合つた糸を、その固い結び目をそつとほどくよう

に。

静かな声が、するりと俺の心に染みこんでいく。

「きみは、どうしたいの？」

どうすべきかではなく、どうしたいか。

俺は。

俺は。

Act・3 青い海と試練の夏（6）

06 きみのとなりへ（1）

泣いている女の子がいた。

さびしいと、ひとりぼっちはいやだと、泣いている女の子がいた。

泣かないで……

俺がしてやれたのは、彼女の隣に並んで俯いた頭を撫でながら、必死に慰めることだけだった。

おれがそばにいるから。ずっとずっと、一緒にいるから

彼女の涙なんて見たくなかった。

いつだって、笑つていてほしかった。

だから、約束をした。

傲慢な思いこみかもしれないけれど、俺の隣にいる彼女は、どんなときも笑顔で、楽しそうで 幸せそうだったから。

そばにいると。ずっと一緒だと。大人になろうとじいさんばあさんになろうと、決して離れないと。

約束を、した。

俺が、彼女の隣にいたかったから。

「ねえ、苑ちゃん見なかつたつ？」

「どこか焦つてているような水沢の声に、俺は思わず振り返った。

「どうしたの？」

不安に追い立てられたような表情で駆けこんできた友人に、松下はテーブルを拭く手を止めた。店じまいの準備をはじめていた仲間

たちの視線が、自然とふたりに集まる。

「お昼休みに出かけたつくり帰つてこないのー。 もつ夕方なの」

…

一瞬、呼吸が止まつた。松下は眉をひそめる。

「一度も帰つてきてないの？」

「うん。交代の時間までには戻つてくるって言つたのに……苑ちゃんに限つて、おかしいよね！？」

「ケータイは？」

長谷の冷静な指摘に、水沢は首を横に振つた。

「つながんないの。何度かけても 電源、切れてるみたいで

「おいおい、それつて……」

声を上げかけた香坂は、何かに気づいたように口をつぐんだ。その隣で、富野が腕を組んで唸る。

「神崎、だれかと一緒に出かけたんだよな？」

「昨日ナンパしてきた大学生とね」

松下は咳くよつて答えると、両手を固く握りしめている水沢の肩にそっと手を置いた。

「いつ気づいたの？」

「一、二時間ぐらい前。さすがに遅いと思って、でもケータイもつながんなくつて……藍ちゃんと一緒に探したんだけど、全然見つかんないの！」

水沢は唇を震わせると、崩れ落びるよつこじやがみこんだ。

「どうしよう。苑ちゃんに何かあつたら……」

「あつちゃん、落ち着いて」

松下は膝を折ると、水沢の背を優しく撫でた。そこへ勢いよく丈部が飛びこんでくる。

「丈部、神崎は？」

「いや……」

尋ねる富野に、丈部は息を整えながら言葉を濁らせた。水沢は顔を歪ませ、深く頃垂れた。

「……それより、いやな噂を聞いた」

「噂？」

「ああ。別の海の家の店員が言つてたんだが、あの高見沢つていう大学生、ここらじやあまり芳しくない評判で有名らしい。見かけに似合わず、毎年何人も女を引っかけては遊んで捨ててるそうだ」すうつと腹の底が冷えるような感覚を覚えた。おまけに、と丈部が苦い口調で続ける。

「仲間がいるらしい。そいつらも似たり寄つたりの連中だそうだ」吐息まで凍りつきそうだった。

ざわざわと頃が粟立つ。寒気を感じているのに、握りこんだ掌の内側がじつとりと湿つていて。

彼女は今、どこにいる？

最後に交わした、冷たいまなざしがフラッシュバックする。次いで、彼女に親しげに話しかけていた男の笑顔が。

彼女を手放したのはだれだ？ 好きにすればいいだなんて言つたのは、大切なものを見誤つたのは。

俺だ。

だから、俺の隣に彼女はいない。

だから、彼女がいるのは。

俺ではない、俺以外のだれかの隣。

脳裏で、白い光が爆ぜた。

「……本原！？」

驚きに染まつた香坂の声が聞こえたときには、もう走り出していた。蹴るたびに舞い上がる砂は熱を失い、あたりは夕闇に呑まれつづつあつた。どこへ行けばいいのかなんて思いつかず、ただ心の叫ぶままに足を動かした。昼の賑わいが嘘のように人の声は途絶え、自分の中の荒い息だけが耳を掠めていく。

後悔か怒りか嫉妬か、それとも他の感情か。爆発するように噴き

出すものにどんな名前をつければいいのか、わからなかつた。

ただ、ただ、彼女がいないという事実が許せなかつた。俺の隣ではなく、他人の隣にいることが我慢ならなかつた。

俺以外のだれかが彼女に触れることも、笑わせることも、怒らせることも、泣かせることも、傷つけることさえ認められなかつた。笑うがいい。俺は馬鹿だ。とこどん追い詰められなければわからないような大馬鹿者だ。

勝負に負けることがなんだ。雀の涙のような男のプライドを踏みにじられても、俺には譲れないものがあるのだ。

俺は、彼女が好きだ。

腐れ縁よりもたちの悪い幼なじみが。どうしようもなくわがままで自己中心的な女王様が。

守れるかどうかわからぬ約束に、心の底から嬉しげに笑った女の子が。

神崎苑香が。

好きだ。

ただひとりの女として想う。これから的人生すべてを捧げてもかまわない。欲しい。手に入れたい。

好きだ。

好きだよ、苑香。

おまえのことが、だれよりも。

好きに決まっている。

手遅れかどうかなんてわからない。間に合わないかもしれない。だからどうした。

奪わないでどうする。取り戻さないでどうする。

女王様の思惑も、友人たちのお節介な親切心も関係ない。俺が望むから、だからこそ。

覚醒しきつた獣が吠え猛る。荒々しい響きは身の内を駆けめぐり、

俺はひたすら残照に染まる砂浜を疾走した。

Act・3 青い海と試練の夏（7）

06 きみのとなりへ（2）

空が夜の色へ塗り替えられると、海辺の街はまばゆい光を纏いはじめた。目を刺すような光の波のなかを泳いでいく人々は、どことなく浮き立っている。

きつと傍から見た俺は、ひとり場違いな表情をしているに違いない。ほとんど通行人を押しのけるようにして雑踏のなかを突き進む。後方から上がる非難の声にもかまう暇もなく、街を彩る光のなかにある文字を求めて絶え間なく視線をめぐらせた。

薄闇に漂うネオンライトの多くは、飲食店や土産物屋、ゲームセンターなどの看板だ。おそらく海水浴客を目標にしたそれらのどこかに、カラオケボックスのものもあるはずだった。

男がナンパした女の子を連れこむような場所。携帯電話がつながらない場所。大人数で、何時間居座つても怪しまれない場所。何が起こっても、だれにもわからない場所。

真っ先に思い浮かんだのが、カラオケボックスだった。

長年彼女に片想いしていたとはい、俺にだつてナンパの経験くらいはある。そういうことに對してすこぶる熱心な香坂に引きずられてというか乗せられてというか、まあ興味がないわけでもなかつたので。

そんなとき、とりあえず向かつた先がカラオケボックスだった。初対面の相手とも適当に時間が潰せ、なおかつ財布に余裕があるとは限らない学生にも手軽な料金。おまけにこちらから呼ばない限り、だれかに邪魔される可能性も低い。

そう、カラオケボックスは個室が基本だ。商売柄、防音設備も整

つていてる。たとえ大声で助けを呼んだとしても、溢れ返る音の洪水に搔き消され、他の部屋にいる客の耳に届くことは難しい。

腹の底からどす黒い何かがせり上がりってきた。思考は冷え冷えと冴え渡り、凍りついた水面のように静かだった。

感情はとっくに沸点を通りすぎ、急激に温度を低下させていた。それでいて、今なら簡単に人を殺せそうな衝動が渦巻いていた。

「 本原！」

流れいく人の波の向こうから、焦ったように俺を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると、見慣れた長身が人混みを搔き分けて近づいてくる。

「 こきなりひとりで飛び出すなよ！ みんなで手分けしたほうが…」

富野は息を整えながら言いかけた言葉を、驚いたような顔で呑みこんだ。

「 ……本原」

「 なんだよ」

「 おまえ、……」「めん。やっぱなんでもない」珍しく富野が口をつぐむ。困惑と心配がない混ぜになつたまなざしが、窺つようを見つめてきた。

「 その、大丈夫か？」

俺は富野から視線を逸らした。

「 別に それより、他のやつらは？」

「 女子は海の家で待機中。香坂と長谷は、街の向こう側を探していくつて」

「 そつか

ゆるめていた歩みを再び速めると、富野が隣に並んだ。器用に人を避けながらついてくる。

「 おまえ、どこ行くんだ？」

「 カラオケ

「 は？」

俺はからかうように舞い踊る光の群を睨んだまま、答えた。

「カラオケなら女連れこんでもおかしくないし、密室を作りやすい。声も聞かれにくいだろ？ 確証はないけど、思いついたからには行ってみる」

「長谷もおんなじこと言つてたぞ。丈部たちは街のほうまでは探してないつて。ただ、向こうが車だつたら……」

「そのときはそのときだ」

考えれば考えるほど、希望も絶望も生まれてくる。それでも立ち止まるわけには、あきらめるわけにはいかなかつた。

「どうすんだ？」

「追いかける」

きつぱりと断言すると、富野は沈黙した。しばらくして、ため息をつくよに咳く。

「……なんか氣い抜けるなあ」

「なんで」

「だつてあの長谷がカリカリするほど焦れつたかったくせに、自覚した途端これだろ。なんか肩透かし食らつた気分つづか……まあ、いいことなんだけど」

苦笑の気配につられ、俺は富野を見上げた。だいぶ高い位置にある優しげな目を更に和ませ、彼は笑っていた。

「おまえつて、神崎のことだけじゃなくていろんなことに対して一歩引いてるだろ。自己主張しないつづか、結構他人を優先してるよな」

俺は口を挟まなかつた。挟んではいけないような気がした。

「それはおまえのいいところなんだろうけどさ。手を伸ばせば届くもんまで見過ごしてんのは、かなり歯痒かつたな。だからこりやつておまえから動き出して、ちょっと安心した」

そんなことを言つ富野の顔が本当にほつとしたようなものだつたから、俺はなんの言葉も返せず前に向き直るしかなかつた。

どうしてこうも俺の周りにはお人好しばかりいるのだろう。ふざ

けているよつでいて、その根底にある思いは限りなく真摯だ。

馬鹿にすることは簡単で、だが気づかず裏切つていたら、きつ

と悔やんでも悔やみきれなかつた。

「だから、今度こそきつちり奪い返してこいよ。逃げるなんてナシだからな」

「……ああ

背を叩く力強い掌に、俺ははつきりと頷いた。決意と覚悟を拳の中に握りこむ。

そして何気なく視線を向けた先に、俺は探し求めていたものを見つけた。あまりにも唐突な、あつけない発見に、思わず自分の目を疑う。

「あ、あそこ！」

遅れて富野も気づいたらしい。それが見間違いではない何よりの証拠だと理解した瞬間、俺は走り出していた。

だれかとすれ違うたびに体当たりするような勢いで、ひたすらカラオケボックスの看板目指して突進する。富野とともに人混みを抜けると、薄汚れたガラスのドアを押し開いた。

「いらっしゃ……って、うわ！」

入つてすぐ目の前にあるカウンターでにこやかに出迎えた店員が、ぎょっとしたように身を退いた。それにはまうことなく、俺はまくし立てるよう尋ねた。

「女連れて入つた大学生ぐらいの男、いませんか？ ポニー・テールの、水色のビキニ着た女の子と一緒になんですが」

「え、あ……ええつと、確かご来店されたかと」

「何号室ですか！？」

「へつ？ あの、二階の二、五号室……っちょ、お客様さん…」

すぐに階段に向かい、一気に駆け上がる。慌てたように店員が喚いていたが、何を言つてゐるのか耳に入らなかつた。

階段を上がつた先には、細い廊下がまつすぐ伸びていた。両側の壁にずらりとドアが並び、突き当たりでふた股に分かれている。あ

ちこちの部屋から洩れてくる微かな音楽が混じり合い、背中がむずむずするような不協和音を奏でていた。

俺たちは、ドアに記された部屋番号を確かめながら廊下を走り抜けた。一一、一二、二二、三三……。

「あつた！」

富野が声を上げた。ぴたり閉じたドアにくすんだ金色で記された部屋番号は、二五。

俺は迷わずドアを開け放つた。ひとつ押し寄せてくる大音量の津波。

カラオケボックスの個室のなかでは広い部類に入るであろう部屋には、人影が八つ。大学生とおぼしき男が五人、彼らと同じか少し下かという年頃の女が三人。

そこに、彼女が、いた。

突然の乱入者に固まっている他の連中と同じように、茫然と目を瞠っている。肩を竦め、壁に背を押しつけてまるで、隣の男に追い詰められたように。

彼女の隣に座っていたのは、間違いないあの高見沢という男だった。

俺は深く長く息を吐き出すと、部屋の中に踏みこんだ。

声にならない声で誰何してくるいくつもの視線を無視して、彼女の前に立つ。さすがに街中へ來たからか、水着の上に見覚えのあるパークーを羽織っていた。それでも白い胸元やそこから続く滑らかな腹部は顯で、俺は臓腑が焼け爛れる錯覚を抱いた。

「…………はじめ？」

ぽかんと、そう表現するしかない顔で彼女は呟いた。俺は無言で手を伸ばすと、その細い腕を掴んで立ち上がらせた。

「帰るぞ」

力をこめて手首を握りしめると、彼女はゆっくりと瞬いた。深い色合いの瞳がようやく現状を理解したように、まっすぐ俺を見つめる。

「うん、……うん」

震える唇を引き結び、最初は小さく、次はもっと大きく頷いた。彼女の体からゆるゆると強張りが解けていく。

「お……おいおい、ちょっと待つてよ」

高見沢が引きつった笑みを浮かべ、もう一方の彼女の手を掴んだ。彼女の薄い肩がぴくりと跳ねた。

「いきなり入ってきて、それはないんじゃないの？ ってか、きみだれ？ この子は俺らのほうが先約なんだけど」

彼女の肌に触れる男の手。真っ白な半紙が悪意のよくな墨の色に染まつていぐ、そんなおぞましさ。

彼女が、汚れる。

「……手え放せ」

「は？」

「こいつに触んな」

殺意と憎悪が迸る。その毒が一瞬で全身を駆けめぐったよう、高見沢の顔から血の気が引いた。

「な、なん……」

高見沢はなんとか口を動かそうとしていたが、どもるだけで言葉になつていなかつた。静かに身の内を蝕んでいく呪い感情の命じるまま、男との距離を詰めかけて。

「ちょっとお客様たち、何してんですか！」

騒々しく駆けこんできた店員の怒鳴り声に、俺は踏みとどまつた。店員の登場に驚いたのか、高見沢の手がゆるんだ。俺は素早く彼女の体を引き寄せると、踵を返して富野に声をかけた。

「富野、行ぐぞ」

「ん。ああ」

「……っ、おい、待てよー！」

しつこく食い下がるのとする高見沢を一警すると、やつばぐつと押し黙つた。盛大な舌打ちのあと、忌々しそうに目を逸らす。

彼女の手を引いて部屋を出る。戸惑いのまなざしを向けてくる店

員を無視して、俺たちはカラオケボックスをあとにした。

追いかけてくる者はいなかつた。もつ彼女に対してもうじりうしようとする意志はないのだろう。それならそれでいい。

彼女はずつと黙っていた。俺も何も言わなかつた。今はただ、掌の中のぬくもりを感じていたかつた。生まれたときからそばにあつた、これからもそうであつてほしいと願うもの。

大切なを取り戻せた。その事実が、ようやく安堵となつて胸を満たす。

手放してしまえば、あっけなくだれかにさらわれてしまつ。それが我慢できないのなら、つないだ手を放さなければいい。

なんて簡単で、困難なことなのか。

それでも、俺の答えは決まつている。迷つて迷つて、遠回りの果てにたどり着いた場所は、すべてのはじまりだつた。

だからもう、そこから逃げ出したりなんてしない。世界中のゼロを探しても、俺の居場所はただひとつなのだから。

カラオケボックスの看板が乱舞する光に埋没した頃、俺は彼女の手を握り直した。それに応えるように、儂さすら感じる指がしつかりと握り返してくる。

それだけでよかつた。それ以上の言葉なんて、なかつた。

Act・3 青い海と試練の夏(∞)

07 ハギ反撃

嵐が過ぎ去ったあの静けさは、気が抜けるほど穏やかなものだつた。

いつもと同じようにして、確かに何かが変わつてゐる。そんな安心感が滲んだ生ぬるい田々。

台風の田ともいうべき高見沢とは、あれからなんの接触もなかつた。一度、砂浜で偶然すれ違つたときも、決まりが悪そうな恨めしそうなまなざしを投げられただけだった。もちろん受け取りなんてしなかつたが。

もう彼女にちよつかいを出すつもりがないのなら、眼中に入れる必要などない。だが、もしも一度目をくり返すといふのなら 相応の覚悟をしてもらおうではないか。

どうやら俺は、彼女が絡むとどこまでも残酷な人間になれるらしい。そのことに驚きつつも、心のどこかで納得している自分がいた。我ながら呆れるほど他人事めいでいるが、俺は案外、危うい場所に立つているのかもしれない。一步踏み外せばどこまでも墮ちていくしかないような、底の見えない闇が覗く断崖絶壁の上に。

そしてその選択を迫られたとき、もしもそうしなければ彼女を失うのだとしたら、俺は簡単に答えを出すだろう。迷いもためらいもなく、あるのはどうしようもない真実だから。

ようやく掴んだ搖るぎない確信を噛みしめる俺を、しかし近所のおばちゃんよりも小づるさく目敏い友人たちが放つておくはずがなかつた。

「 で、いったいいつになつたら告白うのかな？」

貴重な休憩時間、俺は呼び出しを食らっていた。ちなみにここは海の家のバッカヤードで、体育館裏ではない。

いつもの胡散くさい笑顔にうつすらと青筋を浮かべ、ちつとも笑つていなくて長谷が凄んでくる。ここがここまで感情を顕にするなんて珍しい。

「あれからもう一回だよ？ そろそろいい加減にしてくれないと、さすがに僕の堪忍袋の緒も持たないよ？」

「長谷やん、田が殺氣立つてる！ 視線が凶器と化してるから！」
軽く青ざめた香坂が、俺にこじり寄つてくる長谷を必死に止めようとしている。そんなふたりに、富野は苦笑いをこぼした。

「俺も同感だな、本原。このままだと砂浜が血の海になりそうだぞ」「やめーーー！ マジで冗談にならないからー」長谷やんならやりかねないとか思つちゃう自分がおそろしくて悲しい！
ひいいと悲鳴を上げる香坂に、俺は肩を竦めてみせた。

「まあ、そのときは尊い犠牲のうえで鎮まつていただくな」「ちょっと待つて、なんでおれを見んの。富野も『あつ、そつか』なんて顔しない！」

「くれるつていうなら、遠慮なく骨の髄までしゃぶらせてもらひつけ？」

「長谷やんも当然とばかりに乗んなーッ！」

魂の底から叫ばんばかりの香坂を、俺は生あたたかい田で眺めずにはいられなかつた。日頃の鬱憤を晴らすには、俺よりもなおいじられ役の座を欲しいままにする香坂をいぢめることが一番だ。これをまさしく香坂クオリティ。

ひととおり麗しき友愛の披露を終えたところで、俺は素直に白状することにした。ここでしまかそうものなら、本当に長谷が刃傷沙汰を起こしかねない。

「ほつとしてふやけてなかつたとは言わない。ちよつと感慨にふけつてた」

「それでするする今日までなんの行動も起こさなかつた、と？」

「うん……まあ」

長谷ははふつ、と歎息しげなため息をついた。

「「めん、富野。なんか細長くて固いものくれる?」

「殿中で「やれるーー」

「乱心」乱心つと、おまえが「乱心じや」とシシ口みたくなるほど
喚く香坂を宥めつつ、富野は首を横に振った。

「だめだぞ、人殺しは」

「大丈夫。証拠隠滅はきつちつするから」

「おまえなら本当にやり遂げそうだよな……」

「どこのどこのせいだと思つてんのかなあ?」

「い、ひやー、ひひやーひひやー! ほおひつはんはー!」

容赦なく頬をつねり上げられ、俺は降参の意味をこめて犯人の肩
を叩いた。

二十秒ほど無視されたのち、ようやく解放される。赤くなつたに
違ひない頬をさすつていると、もはや長谷の顔からは笑みが消えて
いた。

「ねえ、本原。ここまで来て逃げるなんて、本当に許さないからね
?」

「だれが逃げるかよ」

むつとして言つ返すと、長谷は眉間に深々と皺を刻んだ。

「……即答でわかるくせに土壇場になつて気がゆるんじゃつって、心
底本原らしくよねえ」

「嫌味か」

「褒め言葉だよ?」

よつやく怒りを解いた長谷は、まあやる気は充分みたいだからよ
しとするよ、と愚痴るように呟いた。

「じゃあ改めて作戦会議どこいつか」

「作戦会議?」

いつたいなんのと首を傾げる香坂に、長谷は真っ黒な腹の中身を
覗かせるよつやな微笑で答えた。

「そりゃあもちろん、神崎女史の攻略法を

「ぶふつ」

「汚いなあ、いきなり噴き出さないでよ」

「おまえが変なこと言い出すからだろうが！ なんだよ攻略法って！ しかもなんでおまえら参戦が前提なんだよ！？」

「目には目を、歯には歯を、助つ人には助つ人を、だよ。女子の助力を得た神崎女史にひとりでも勝てるっていうなら、いらないお節介は焼かないけど？」

俺はうぐつと声を詰まらせた。そんな自信、むしろ掃いて捨てられるほどもらいたい。

「果林は優秀だからね。太刀打ちできるのは僕ぐらいだと思つけど？ 水沢女史や丈部女史も、結構容赦ないんじゃないかなあ」頭を抱えてうずくまりたくなつた。そんな俺に尻目に、自称参謀は実に楽しげに宣言する。

「さあ、反撃をはじめようか」

Act・3 青い海と試練の夏（9）

08 満開の花火の下で

夜が世界を呑みこんでも、その日は砂浜から人気が絶えることはなかつた。

昼間ほどではないが、細長く伸びた砂浜のあちこちに固まつた人影が見える。その多くが波打ち際から離れた場所に陣取つて、これから起きることへの期待にざわめいていた。

暗い空に雲は少なく、山吹色の月が威風堂々と輝いている。闇に溶けた波間に月影が落ちて、ゆらゆらとたなびいていた。

微かな潮風に運ばれてくる波の音にまきらわすように、俺はこつそりとため息をついた。ちらりと隣を盗み見れば、Tシャツにショートパンツという出立ちの彼女が膝を抱えて座りこんでいる。長い髪はいつものようにほどかれたまま、上目がちに前を向いている横顔を撫でるように小さく揺れていた。

俺は彼女と並んで地面に腰を下ろし、両手を後ろについて片膝を立てていた。彼女との距離は、およそ拳ひとつ分。周囲に友人たちの姿はなく、近寄つてくる者もいない。

つまり、ふたりきり。

これが自称参謀の考案出した『作戦』だった。今夜開かれる花火大会に彼女を誘つて告白せよと。

……提案というよりも脅迫に近かつたかもしない。なんだかんだ言いつつ女子も乗り気だつたらしく、あれよあれよという間に俺と彼女はこの場に置き去りにされた。こんなときに限つて友人たちは見事な連携プレイと手際のよさを發揮する。まったくもつて器用なことだ。

俺は携帯電話の液晶画面を開き、現在の時刻を確認した。花火の打ち上げがはじまるまであと少し。

「の状態になつてからすでに十分以上経っているが、未だに会話らしい会話をしていない。何から話せばいいのかわからない、微妙な沈黙。

いつまでも無言でいるわけにはいかないのだが、うまい言葉が出てこない。口にする前にあれこれ考えてしまい、形になりきりず溶けてしまつ。

たぶんここに長谷がいたら間違いなく凶器を持ち出してくれるよな、と半ば現実逃避めいた考えが脳裏をよぎつたとや、

「この前は、ありがと」

不意に、まるで呟くように彼女が口を開いた。

「迎えてくれて、ありがと」

「……ああ」

いつたいなんのことかと思ったが、すぐに先日のことだとわかった。俺は鮮やかな月を見上げながら、口調を強めて言った。

「我慢できなかつたから」

わずかに伏せられていた彼女の視線が浮上し、こちらを向く。俺は今度こそ彼女を見据えた。

「たとえ本気じゃなかつたとしても、おまえがだれかの隣にいるなんて我慢できなかつた」

彼女はじつと俺の言葉を耳を傾けていた。一言一句聞き漏らすまいとするようだ。

一度口火を切つてしまえば、あとはするすると言葉が溢れてきた。湧き上がる想いが水泡となつて水面から現れ、弾けた瞬間、声となつて響く。

涸れることのない泉から流れ出したものが静かに胸を満たし、指先まで浸透していくようだつた。

ああ、俺はこんなにも渴いていたのだ。だから苦しくてたまらなかつた。

ささくれ、ひびわれていた心を潤す感情は全身はめぐり、体の奥底から力となつてこみ上げてくる。

今ならなんだつてできる気がした。

人を想うということは、こんなにも、こんなにも。

幸せで、胸がいっぱいになるのだ。

「おまえに試されて、本音を思い知った。俺はおまえが俺以外のやつの隣にいるなんて、いやだ。おまえは俺の隣にいてほしい。おまえの隣にいるのは、俺でありたい」

それ以上なんてない。十全であることを知ったとき、人はだれでも無敵になれる。

何かしたいと願つ、その人のために。

「……どうしてそう思うの」

彼女が小さく訊いてくる。震えているような、掠れた声で。

「はじめは、どうしてあたしの隣にいたって思うの」

波の上に映る月のように揺らぐ双眸が、どうしようもなく愛しかつた。

その愛しさのままに、俺は一番伝えたかった言葉を紡いだ。

「おまえのことが、好きだから」

次の瞬間、ドーンと空気が震えた。

彼女の頬が夜目にも赤く染まり、見開かれた瞳の中に鮮烈な光が映りこむ。ほぼ同時に空を仰ぐと、月にしだれかかるように大輪の花火が咲いた。

赤、青、緑。次々に原色の光が花びらを広げ、月の独壇場だった夜空に美しい模様を織り上げる。

満開の花火。

刹那の艶姿を網膜に残し、目を凝らす間もなく消えていく。

「……あのとき逃げたのは、なんで？」

月を背景に咲き乱れる花火を見上げたまま、彼女が問うてきた。

俺は視線を隣に戻した。

「あのとき？」

「あたしの寝こみを襲おうとしたとき」

少し棘のある声とまなざしが返ってくる。一瞬言葉が詰まりそうになつたが、どうにかため息で押し出した。

「……怖かつたんだよ」

情けない限りだが、それが俺の本音だつた。

「おまえに拒絶されんのが、怖かつたんだ。あんな馬鹿なことじついて言えることじやねえけど」

自嘲せずににはいられなかつた。

彼女は 再び黙りこんでしまつた。きゅっと唇を引き結び、痛いくらいの強さで睨んでくる。ほんの一瞬、花火に染まる瞳が大きく震えた。

「ホンっとに、馬鹿じやないの」

くしゃりと歪んだ彼女の表情に、俺は思わず息を吸いこんだ。みるみる潤んでいく双眸に緊張してしまつ。

「なんでそいやつて決めつけるのよ。いつあたしがいやだつて言った？ ひとりで勝手に思いこんで逃げ出して、あたしがどれだけ……」

とうとう溢れた涙が、彼女の頬を流れ落ちる。彼女は膝の上で両手を握りしめていた。

「……っ、嬉しかったのに！」

ドオン、とまた花火が上がつた。

「そりやびっくりしたけど、いやじゃなかつた。嬉しかったの！」

彼女は飛びこむような勢いで俺の胸を叩いた。反射的に受け止めた細い体のやわらかさに、電流が頭のてっぺんまで駆け抜ける。

胸元に顔を埋めた彼女は、本格的にすすり泣きはじめた。くぐもつた泣き声に合わせて肩が震える。俺のTシャツを掴んで放さない手を見て、俺はようやく彼女の背に腕を回した。

「……苑香」

名前を呼ぶと、彼女はますますすがりつってきた。俺は唾を飲み下し、彼女を抱きしめる腕に力をこめた。

「苑香」

潮の香りに混じる彼女の甘いにおい。頭の芯が熱でとろけてしまって、首筋をくすぐる彼女の髪の毛の感触に、俺はたまらず目を閉じた。

腕の中の彼女が、世界のすべてだった。

「苑香……顔、上げて」

抱擁をゆるめると、彼女はゆっくりと顔を上げた。頬に残っている涙を拭つてやると、喉を鳴らす猫のように目を細める。

……本気で鼻血を噴きそうになつた。

幸福感に窒息しそうになりながら、俺は彼女の頬を両手で包みこんだ。ほとんど吐息のような声で訊く。

「キスしてもいいか?」

あの日、臆病で卑怯な俺は勇気が欲しかつた。

まっすぐに彼女と向き合つ勇気を。想いを告げ、そして彼女の答えを受け止める勇気を。

それは嘘ではなく、だが言い訳に過ぎなかつた。

俺があんな馬鹿げた失敗をした理由は、俺が本当に欲しかつたものは。

苑香。

俺だけの女王様。

「……今更訊かないでよ」

彼女らしいひねくれた返事に笑つてしまつ。彼女は拗ねたように唇を尖らせたが、やがてゆつくりと瞼を下ろした。

花火が上がるたび、鮮やかな光に彩られる彼女の顔に見とれながら、俺はそつと唇を落とした。

はじめての口づけは、彼女の涙の味がした。

Act・3 青い海と試練の夏（10）

09 されど試練の夏は続く

夏の空には、今日も太陽が輝いていた。

光の粒のような飛沫を弾いて笑う人々。砂の上に刻まれた足跡を、打ち寄せる波があつとこゝ間に消していく。だが陽気な喧騒は絶えることなく、それどころか熱気となつて広がっていくようだつた。もうすっかり見慣れた光景だ。この数日のおひでに日常となつつあるそれが、なぜか愛しい。

ここにいるだれもが同じ時を分かち合い、それぞれの夏を過ごしている。まるでひとつの物語を織り成すたくさんのエピソードのように。

俺も、彼女も、友人たちも。

「なあににやけてるのかなあ？」

含みを感じる声とともに、長谷が肩に手を置いて顔を覗きこんできた。おまえのほうこそ笑顔がにやにや言つてるぞ、ヒシツ口みたい。

「昨夜の甘~い逢瀬でも思ひ出しきつてるの？ いやらしくなあ、本原つてば」

「違えよ！ なんで断定形なんだよ！？」

「照れない照れない。で、結局どこまでいったの？ まさかキス止まりなんてことはないよね？」

「デリカシーもプライバシーもない質問だなー 断固黙秘する！」

「うわあ、ABCのAで満足しちやつたの？ やだやだ、これだから初心者は」

「おまえら絶対覗き見してただろーッ！」

あまりのありえなさに切腹したくなつた。だれか、だれか出刃包丁を持ってくれ……！

最悪だ最低だ、と地面にめりこむ勢いで落ちこんでいると、ふ、と長谷が軽い吐息を洩らして笑つた。

「でもまあ、これでようやく安心できたよ。百点満点にはほど遠いけど、なんだかんだがんばってたと思つよ」

手のかかる教え子を見る教師のような目で、そんなことを言つ。鼻の奥がツンとするような切なさがこみ上げてきて、俺はわざとらしく鼻をこすつた。

「だれかさんたちにさんざん尻ケツを蹴つ飛ばされたからな」

「そうでもしなきゃ動かないようなヘタレだったからね」

くすぐりと喉を鳴らす長谷は余裕そのもので、俺は素直に降参した。

「……感謝してる」

どんなに馬鹿でも情けなくとも見捨てずに、最後まで手を差しのべて背中を押してくれた。

彼らにめぐり会えたことは、俺の人生における最高の幸運のひとつに違いない。

「ありがとな」

長谷はくすぐつたそつに目を細めた。

「僕らは、僕らにとっての当たり前のことをしただけだよ。……でも、その気持ちは受け取つておく

大切にしてね。

最後に続いた言葉に、俺は力をこめて頷いた。

「ああ」

はつきりと口にはしない。だがそれはまぎれもない、俺と長谷との

彼女を思い、俺を思ってくれる彼らとの約束だつた。

「……おや。噂をすればお姫様のお越しだよ」

何かに気づいたらしい長谷に促されて振り返ると、波打ち際からこちらへ向かつて駆けてくる彼女の姿があつた。

お姫様というよりも、女王様と称するほうがふさわしい

俺の

恋人。

そう呼べることが叶えられた、今までこれからもただひとりの、俺の好きな人。

「また水着だけだし……」

「これから苦労するねえ」

肩を叩く長谷の生ぬるい笑みが心に痛い。

「ふたりとも、せつかくの半日休みなのにそんなところで何してんのよ！」

再びポニーテールに結い上げた髪を弾ませながらやつてきた彼女は、降り注ぐ陽光よりもまぶしかった。まっすぐ俺の傍らに寄ってきた時点で、頭のねじが一、三本ゆるんだ。

しかし、それでごまかされてはいけない。

「おまえなんで上に羽織ってねえんだよ？　あれだけ注意しただろうが」

「だつて海に入んのよ？　塩水に濡れたら、洗濯してもべたべたになっちゃうもん」

「四の五の言わずに着ろ！　あーもーいい、取つてくれる！」

「ちょ、なんでそんなにうるさく言うわけ？　日焼け止めなら、水に濡れても落ちにくいやつだから大丈夫だつてば！」

「そうじゃねええ……っ！」

どこまで鈍感なんだと怒鳴りかけたとき、それまで静観していた長谷がにっこりとのたまつた。

「神崎女史、神崎女史。本原は妬いてるんだよ。周りの男がみんなきみのこと見てるから」

「ばつ……」

「え？」

俺は一瞬呼吸困難に陥り、彼女はきょとんと目を瞬かせた。言葉を失つたまま硬直した俺に、彼女の大きな瞳が問いかけてくる。

「やうなの？」

「ここで頷ける男がいたら、そいつは勇者だと思つ。」

固まり続ける俺に彼女は瞬きをくり返していくが、やがてにまた
つと口の端を持ち上げた。

「そつかあ、そなんだあ……つまり俺の前だけで着るつことね
？ だつたら言つてくれればいいのに」

長谷と同種の表情を浮かべた彼女は、凍りついている俺から上着
を奪つて袖を通した。男物であるためにサイズが合わず、胸元を残
して前身頃のチャックを閉めると、まるでそれだけ着ているようだ。
これはこれでいい……よくない気がする。

「これでいいでしょ？」

満面の笑顔で小首を傾げ、腕にすり寄つてくる。俺はぎこちなく
首を縦に振ろうとして、

「……つて、ちよ、苑香さん！？」

「なあに？」

離れようとするば、彼女はますます密着してくる。腕に
当たるやわらかい何かがふにゃりとたわんだ感触に、俺は総毛立つ
た。

身長差から見下ろす形になつてしまつ俺の視線の先には、狙つた
かのように上着から覗く彼女の胸元。白い肌に刻まれた影の意味を
考えるな……！

彼女は爪先立つて俺の耳元に唇を寄せると、息を吹きこむよつこ
ささやいた。

「今度はふたりつきりで来よつね。 もちろん、お泊まりで」

「うそつせま、と弦く長谷の声が遠く聞こえた。

——難去つてまた一難。
じつやう、俺の試練の夏はまだまだ続くよつだ。

Extra · i 女王様の騎士（前書き）

決着編後日談。
苑香視点。

「さあ泣いて喜べ、崇め奉れ。苑香様のおなりであるぞ……つて
いつものように幼なじみの部屋を急襲すると、珍しいことに彼は
座卓に突っ伏して居眠りをしていた。

ちょうどこちらに向けられた寝顔はなんとも無防備だ。普段は冷
めたような表情ばかり浮かべるくせに、ぱかりと中途半端に開いた
口から寝息を洩らしている姿は、子どもの頃と少しも変わらない。

「……もしもーし、はじめさん？」

苑香ははじめに忍び寄ると、耳元にそっとささやきかけた。反応
はない。思いきり熟睡している。

「まあ、あんたに狸寝入りなんて巧妙な技は無理だもんね……」
完全に寝入っていることを確認し、苑香ははじめの隣にぺたりと
座りこんだ。

本人はクールぶつっているつもりなのだろうが、この幼なじみはお
そろしく嘘や演技が下手だ。ポーカーフェイスとはほど遠い人物で
ある。彼の友人の香坂京平は単純ゆえにわかりやすいが、はじめの
場合はよくも悪くも素直なのだ。「本原くんは優しいからね」とは、
人間観察が趣味という松下果林の言である。

はじめは優しい。だがそれは、ときに毒にもなる優しさだ。

「昔つからお人好しよね、あんた」

苑香は座卓に頬杖をつくと、じつとはじめの寝顔を注視した。少
し長めの前髪の下にある面立ちは、別段端正なわけでもない。もは
や当たり前になってしまった眉間の皺、切れ長な一重の目、不機嫌
そうに引き結ばれた唇。たいてい抱かれる第一印象は「とつつきに
くそう」だ。だからこそ苦笑をこぼす瞬間のやわらかさなどといっ
たら、軽く椅子から転げ落ちるような衝撃である。

当の本人は知りもしないが、そのギャップに打ちのめされる異性
はいないわけでもない。なんだかんだ言いつつも放り出さずにつき

合いきる面倒見のよさに、特に同学年や後輩の女子からは受けがよかつたりする。現に、女の子同士の他愛ないおしゃべりつまるところ恋愛話の最中に、ふとはじめの名前が挙がることがそれなりにあった。

おそらく本気だつただれかもいたのだろう。だというのに、はじめに近づく者がいなかつたのは、間違いなく自分のせいだ。

他者の入りこむ隙がないほど、はじめの瞳はまっすぐに苑香だけを見つめていたから。

はじめの目に『女』として映るのは苑香だけ。それ以上もそれ以下もない。至極単純で、だからこそ搖るぎない事実に、彼の優しさに惹かれた者は叩きのめされる。

だからはじめは優しくて、残酷なのだ。

わかつているからこそ彼のそばにいる人々は、はじめをそういう対象には捉えない。特別や大切に思つても、それはあくまで仲間や友人として。

はじめに恋するのは、あまりに痛くてつらすぎるから。

裏を返せばそれは自分にも通じることだが、どうでもいいような他人にくれてやる優しさなどあいにく持ち合わせていない。人間関係を成り立たせるうえで必要な場合もあるが、それですら最低限である。

そもそも苑香は優しさを与える人間ではない。記憶にも残らないような昔から、自分はずつと与えられてきた。目の前で眠る少年から、惜しみないほどの想いとぬくもりを。

絶え間なく降り注ぐ慈雨のようなそれを、いかに多く受け止めるか。苑香はずつとそんなことばかり考えてきた。だから他人に優しくするどころか、はじめに報いることすら難しいような女になってしまった。

申し訳なさがないわけではない。だがそれよりも、納得する部分が大きかった。当然だわ、だつてこいつはあたしのものだもの。

「……我ながら、ホント独占欲の塊よねー」

苑香はしみじみと呟くと、あゅんとはじめの頬を指先でつついた。ぴくり、と微かに頬が動く。

それでも田覓める様子のないはじめの顔に、ほんやりとした面影が重なった。今よりもずっと幼く、屈託のなかつた男の子。苑ちゃん、と舌足らずに名前を呼ぶ声が甘く甦る。

あれは弟の彰^{շահ}が生まれたばかりの頃。

それまで自分だけのものだつた両親を新参者に奪われてしまつた。お姉ちゃんなんだからと諭されても、はじめて見る小さな赤ん坊を自分の弟だと可愛がる余裕は、つい先日までひとりっ子だった甘えん坊にはなくて。

お母さんもお父さんも、もう苑香なんていらないんだ！

さびしさと悲しさが喉の奥までいっぱいになつて、もう勝手にしながらと母に放り出されるまで泣きじゃくつた。

止まらない涙、押し寄せてくる絶望と孤独。このままひとつまちで死んでしまうのではないかと恐怖に閉じこめられたとき、まるで正義のヒーローのように彼は現れた。

おれがそばにいるよ

大人になつても、おじいちゃんとおばあちゃんになつても、ずっと一緒にいるよ。苑ちゃんのそばにいるよ。

泣かないで……

隣に寄り添つて、しまいには自分が泣き出しそうになるほど必死に慰めてくれた。脱水症状を起こすのではないかというほど泣き続けて、ようやく苑香の涙が収まるまで、そばにいてくれた。あのときだ。

あのときから、はじめは苑香のものになつた。

「ねえ、はじめ……あの約束、憶えてる？」

問い合わせつつも、苑香には確信があつた。そうでなければ、今のふたりの在り方はありえない。

苑香にしてみたら、よつやくここまで来たか、である。互いの胸に抱えた想いが同じものだと気づいたときから待ち続けていたとい

うのに、この男といたら「拒絶されるのが怖かつた」などとのまう始末。

「あんたってホント鈍感よね……」

自分と同じぐらい、よそ見なんてする暇もなく注がれる苑香のまなざしに気づかなかつたとは。

だから勝負に出た。あまりの泥仕合に、思いがけず一いちらも追い詰められてしまつたが、それでも勝利をもぎ取つた。

手に入れた。今度こそ本当に、完璧に。

「約束、最後まで守つてもらひからね」

大人になつても、おじいちゃんとおばあちゃんになつても。ずつと、一緒。

苑香は一度手を引つこめると、今度ははじめの頬に掌を添えた。昔よりも頬骨が張り、顎にかけての輪郭がすいぶん鋭角的になつた。ふと、むせ返るような夏の夜の空氣を思い出す。抱きしめられた腕の力強さ、すがりついた胸の広さ。

体の奥底に火を点すような、掠れた呼び声を。

「はじめ」

頬杖を外して顔を傾け、苑香ははじめの顔を覗きこんだ。伏せられた睫毛が意外と長い。

そろそろ眠れる王子様に目を覚ましていただきたいのだが。

いや。

「あんた、王子様つて柄じゃないわね」

王子様にしては情けなさすぎる。下僕 　 といつのはあまりロマンチックではない。

苑香はしばらく沈思していたが、ふつと唇を綻ばせた。

「さしづめ、騎士ナイツつてどこかしら

約束を交わした遠い日から、苑香のそばにいる さびしがり屋な女の子を守り続ける優しい騎士。

今までも、これからも。いつまでも。

それはきっと、永遠。

途方もない幸せを思い描きながら、夢から騎士を呼び起すために、女王様はやわらかな唇を寄せた。

あのときは照れくさくて言えなかつたけれど、白状するわ。

大好きよ。

あたしの騎士様。

Extra · ほぐの家族（前書き）

決着編その後。苑香の弟・彰視点。

Extra・2 ぼくの家族

ぼくの家族

五年一組 七番 神崎彰

ぼくの家族は、お父さんとお母さんと姉ちゃんとぼくの四人家族です。だけど、ぼくには姉ちゃんのほかにもひとつひとり兄弟がいます。それは、ぼくの家のとなりに住んでこむお兄さんです。

「ただいま」

ちょっと重い玄関のドアを開けると、階段の上からいつものように賑やかな声が降ってきた。

「ちょ、おま、いつたいどこ触つてんだ!? 他人をベッドに押し倒すな、ほくそえんで舌なめずりすんな!」

「あーら、別にあたしの部屋で向しようどあたしの勝手でしょう? 父さんは仕事、母さんは近所の奥様方とショッピング。今はこの家にふたりっきり」と来りやあ、やるひとなんて決まってるじゃない

い

「決まつてたまるか! 時と場所を考えろ! もうすぐ彰が帰ってくるだろ? がつ」

「『ちやがひやひがひ』わね! 『据え膳食わぬは男の恥』って言葉を知らないわけ! ?」

「この状況のどじが俺にとつて据え膳だと…? むしろおまえの据え膳だろ? がッ」

……ぼくは大きく息を吸いこんだ。

「た、だ、い、まー」

途端、シーンッと一階が静まり返る。ひと呼吸置いて、どたばたと慌ただしい物音が階段を転がり落ちてきた。

やれやれとため息をつき、ぼくはようやく家の中に入ることができた。脱いだスニーカーは、几帳面に並べてあるぼくのものより大きいスニーカーとちょっと小さいローファーの横に置く。「靴はきちんと揃えて置くよ!」って、兄ちゃんから口を酸っぱくして言われている。

洗面所で手洗いとうがいをして（これも兄ちゃんからの厳命だ）ダイニングに行く。テーブルの上にはお母さんからの伝言メモと、箱に入ったドーナツが置いてあった。

『 彰くんへ

お母さんはお友達とお買い物のついで来ます。今日はお姉ちゃんが早く帰ってくるそうなので、お腹が空いたらまーくんに何か用意してもらつてくれさい。

お母さんより

……メモを読んで、ぼくは微妙な気持ちになつた。

『 まーくん』とは兄ちゃんのこと、ぼくの家のお隣さんである。ぼくの姉ちゃんと同級生で、もつという姉ちゃんのカレシだ。

兄ちゃんはとても真面目で面倒見のいい人で、姉ちゃんよりもよっぽど本当の兄弟のようにぼくをかわいがってくれる。今日みたいにおやつを買ってきてくれたり、宿題を見てくれたり、休みの日に遊びに連れていってくれたりする。

お母さんはそんな兄ちゃんを我が子以上に信頼していく、常々「まーくんに任せておけば、苑ちゃんも彰くんも問題なし!」なんて

笑顔で言つてこる。お父さんは、複雑そつた無表情で黙つてこるけれど。

「だからおやつの用意まで済んでおひさじかと黙つよ、お母さん」

「ぼくはほそりとシシ口んだ。たけどそんな期待を裏切れない」ところが、兄ちゃんの兄ちゃんたる由縁……なのかもしれない。箱を開けると、中には色とりどりのドーナツが並んでいた。ぼくは浅いお皿を三枚用意すると、兄ちゃんと姉ちゃんの好きなものをそれぞれひとつずつ乗せた。最後に自分の分を選ぼうとして、ちょっと迷う。結局、最近ここの「新発売!」と宣伝してくるものに挑戦してみることにした。

冷蔵庫からジュースを出して、三人分のグラスに注ぐ。ドーナツと一緒にお盆に乗せて、そつと一階へ運ぶ。背中のランドセルが厄介だ。

なんとか階段をのぼりきると、姉ちゃんの部屋のドアがちよっぴり開いていた。道理でよく声が聞こえたわけだ。

「ぼくは念のため、ドアから少し離れた場所で声をかけた。

「兄ちゃん、両手塞がってるからドア開けて!」

ばたんっと弾けるようにドアが開いた。自分で開けたのになぜかびっくりしている兄ちゃんが、ぱちぱちと皿を瞬かせた。

「ああ……彰、おかえり」

「うん、ただいま。ドーナツ持ってきたよ」

「あ……ありがとな。重かつだる」

「大丈夫だよ」

兄ちゃんは困ったように苦笑になると、ひょいとぼくの手からお盆を取り上げた。「一緒に食おうか」というお誘いをもらつてから部屋の中に足を踏み入れる。

姉ちゃんはベッドに腰かけて腕を組み、吹雪のよつな皿でこいつを睨んでいた。ぼくは同じくらご温度を下げた視線をお返ししてやつた。

「……お邪魔虫ぬ」

憎々しげな呟きにて、ぼくは肩を竦めてみせた。「わあ、舌打ちつてこんなに大きく響くんだあ。

「おまえなあ、実の弟に向かつて舌打ちするなよー。」

「神崎家の家訓は『素直に生きる』よ」

「……納得しちまつ自分が悲しいんだけビ」

遠い目をしつつ、兄ちゃんは座卓の上にデーターナンピジュー斯を置いていく。ぼくはランドセルを下ろして兄ちゃんの隣に座った。

「兄ちゃん、データーナンピジューがわざわざありがとつ」

「いや、おまえが昨日食べたいつて言つてたからね。ちよハジ半額券もらつたところだつたから」

田つきがいいとはいえないのに、兄ちゃんの笑つた顔はとても優しい。兄ちゃんに頭を撫でてもらつとの回じくりこ、ぼくはこの顔が好きだ。……兄ちゃんには内緒だけれど。

「あ、た、し、が、食べたいつて言つたからよー。」

兄ちゃんを挟んで反対に座つた姉ちゃんが余計なことをつけ加える。ぼくはしみじみと呆れた。

「姉ちゃんつてさ、ホントに兄ちゃんのことが大好きだよね」

兄ちゃんが盛大にむせた。姉ちゃんは眉を片方跳ね上げ、それからとろけるように微笑んだ。

「だから、あんたにだつてあげないわよ」

「別にいいよ。だつて、どうせそのうつホントの兄ちゃんになるんだし」

ぼくはいただきますと手を合わせてから、データーナンピングへりとかじりついた。うーん……まあまあかな。

隣の兄ちゃんは、すっかり息も絶え絶えになつていた。

「なつ、ちよ、何言つてんだ！？」

「だつて兄ちゃん、そのうち姉ちゃんと結婚するんでしょ？ 姉ちゃんが兄ちゃんとやつといわつといわついたつてお母さんに報告した日の夕飯、お赤飯だったし。お母さんすっかり舞い上がりちゃ

つて、ネットで流行りの結婚式場とか探してたよ。お父さんは『はじめくん、夫婦円満の秘訣は忍耐だ。とにかく忍耐だ……』って空の彼方に呟いてたけど

「おばさん……おじさん……」

兄ちゃんはがくりと座卓に突つ伏した。それを横目に、姉ちゃんはひたすら満足げにやついている。

「ちなみに、おばさんからは『初孫はぜひ女の子で』ってリクエストされてるんだけど？」

兄ちゃんのお母さんであるおばさんは、いつのお母さんとツーで力一な間柄だ。そこに姉ちゃんが加わると、兄ちゃん曰く『鬼に金棒どころか機関銃が備わったようなおそしき』らしい。

女傑三人衆の集中砲火を浴びた兄ちゃんは、もはやぐうの音もない様子だ。ぼくはなんだかかわいそうになつて、慰めるつもりで話そうと思つていたことを切り出した。

「大丈夫だよ、兄ちゃん。そんなに恥ずかしがらなくとも、みんな知つてるから。だつてぼく、作文に書いたんだもん」「……は？」

兄ちゃんは顔を上げると、ぽかんと目を丸くした。姉ちゃんが怪訝そうに眉根を寄せる。

「いつたい何を？」

「夏休みの宿題で、『ぼく・わたしの家族』ってテーマで作文を書いたんだ」

ぼくは掌についたダーナツの肩を払い落としながら答えた。

「ぼくには姉ちゃんの他に兄弟みたいな人がいて、いつか姉ちゃんと結婚してホントの兄ちゃんになつてくれるから、それがとても楽しみですって」

沈黙が落ちた。

兄ちゃんと姉ちゃんは、揃つて絶句していた。しばらくして、兄ちゃんは湯気が立つような勢いで真っ赤になり、ぱたりと床に倒れこんだ。姉ちゃんも頬を赤くして、「あんたって、馬鹿じゃないけ

「阿呆よね……」と呻いている。

ぼくはそんなふたりの様子を眺めながら、にんまりと笑つてやつた。ちゃんと弟をやきもきさせってきたのだから、これぐらいの仕返しは我慢してほしい。鈍感で臆病な兄ちゃんと、わがままで意地つ張りな姉ちゃん。どうしようもないふたりだけれど、ぼくにとってはだれよりも幸せになつてほしい人たちなのだから。

前言撤回。兄ちゃんと姉ちゃんと一緒に食べるデーナシは、やつぱつおいしくに決まっている。

* * *

ぼくは、お兄さんと姉ちゃんが一緒にいるところを見ることがとても好きです。笑い合つて、ふたりを見てみると、なんだかぼくまで嬉しい気持ちや楽しい気持ちになつてくるからです。

だけど、お兄さんと姉ちゃんはいつもふたりつきりじゃなくて、ぼくも仲間に入れてくれます。すると、ぼくは一倍も二倍も幸せになるのです。

ぼくをいつでも世界で一番幸せにしてくれるぼくの家族は、最高の家族です。ぼくは、ぼくの家族が大好きです。

special . 1 みんなのためでやれる! (前編)

2007年クリスマス企画。高校一年生のふたり。

Special . 1 めみのためであります」と

「…と試合終了を告げる電子音が静かに鳴った。

俺は唾を飲むごとに、そろそろと腋の下から体温計を引き抜いた。ベッド脇で控えている審判にそれを渡す。審判は無表情に体温計を見つめ、ゆっくりと口を開いた。

さあ勝利の女神よ、今こそ俺に微笑めえ！

「三十八度一分」

一発KO負け。

「はい、今日は一日中寝てるの決定ね～」

無情な判定に、俺はベッドに崩れ落ちた。

「そ、そこをなんとか……！」

「なんとかなりませーん。ほら、さつさと布団の中に入んなさい」審判は軽やかに俺の訴えを無視すると、さつさと布団を被せてくれた。さすが俺の母親だ。

「お友達にはお母さんが連絡しとくから、おとなしく寝てんのよ？ わかった？」

「…………」て顔を覗きこんでくる母さん、「俺はため息混じりの頷きを返すしかなかつた。

「…………了解」

正直なところ、布団にぐるまつた途端に「あ、こりや駄目だ」と思った。全身から力が抜けて、とうてい起き上がりがれそうにない。脳味噌が煮え立つていてるような熱と痛みに、頭の芯が痺れてくる。目を開けていることさえ億劫になってきて、俺は瞼を閉じた。

今頃友人たちは、カラオケボックスで大いに盛り上がっているのだろうか。たぶんトップバッターは香坂だ。もしかしたら、水沢とマイクをめぐつていつものように喧嘩しているかもしね。それを見て、みんなが笑つて。

彼女も、一緒に。

……ああもう、今日は最低最悪のクリスマスだ。

ひんやりとした感触を頬に覚え、俺は薄く目を開いた。ぽんやりと滲んだ視界に人影が映りこむ。だれだろう、母さんだろうか？

「目、覚めた？」

しかし耳元で聞こえた声は、ここにはいなはずの彼女のものだつた。

朧な輪郭が、やがて見慣れた幼なじみの顔を形作る。伏し目がちに覗きこんでくる双眸。俯いた睫毛の長さまでわかりそうだ。普段なら耐えきれないような至近距離も気にせず、俺はぼうっと彼女の瞳を見つめ返した。

「……逃げないのね、いつもは逃げるくせに
だいぶ重症ね、と彼女はひとりごちた。

「冷えピタ、貼り替える？ 氷枕は？」

「……大丈夫、だ」

どうしたのだろう、彼女が優しい。あの、わがまま放題の女王様が。いや、そもそもどうして彼女がここにいるんだ？

……ああ、夢か。

熱に浮かされて彼女の夢を見るなんて、俺の頭は相当やらでしまつていてるらしい。嬉しいやら虚しいやら、俺はどれだけ彼女のことが好きなのだろう。

滑らかな指の腹が優しく頬を撫でる。頬を包みこむ掌の冷たさが心地いい。

だが今の俺に心地いいところとは、彼女の手はかなり冷えきつてしまつていてる状態だ。

「……手」

「え？」

「冷てえ……」

「ああ。戻つてくるとき、手袋したかったのよ。あんまり急いでたから」

珍しい。あんなに手が荒れると嘗つてためこいつけていたのよ。ふと、どうしようもないほど都合のいい考えが思い浮かんで、俺は口の端を持ち上げた。

「……そんなに俺が心配だつた？」

いつも俺なら、絶対訊けない質問だ。

彼女はぐるりと田を丸くして　ふんわりと、それこそどんなクリスマスケーキよりも、甘く、やわらかく微笑んだ。

「当たり前でしょ」

……脳味噌がとろけるつて、こうこうことを嘗つてのだからつか。熱と頭痛とは違う原因で意識が麻痺しそうだ。

やつぱり夢なんだなあ、と俺は納得した。現実の彼女がこんなことを口にするはずがない。

ああ、けれど。

こんな幸せな夢が見れるなら、クリスマスに風邪を引くのも悪くないかもしれない。

「はじめ」

「んー……？」

再び震みはじめた視界の向こうから、彼女がやせやせてくる。「そばにいるから」

「……ん」

「あなたがしてくれたみたいに、そばにいるから」

穏やかな波にさらわれるよう、ゆっくりと彼女の声が遠のいていく。いつの間にか瞼が落ちたのか、田の前はまどろみの闇に満たされていた。

「……だから早く、元気になつて」

吐息のような弦きは、まるで泣き出す寸前のよつて震えて聞こえた。

大丈夫だと伝えたくて、俺は冷たい彼女の手に自分のそれを重ねた。どうか俺の熱で彼女があたたまるように、サンタクロースに願いながら。

special · 2 俺と女H様の願い(前書き)

2008年七夕企画。田常編と発端編の間。

Special . 2 僕と女王様の願いこと

憶えている限り、僕が七月七日の夜空にかけた一番古い願い事は、『おとうとかいもつとがほしい』だった。

ちょうどその頃、幼なじみの彼女に弟が生まれ、僕は悔しくて羨ましくてしょうがなかつたのだ。結局その願いは叶えられず、僕は現在に至るまでひとりっ子のままなのだ。

そして次の年は、確か……。

「なあにほんやりしてんのよ。まだ書いてないの？」

尖った口調の彼女の声に、僕は回想から引き戻された。至近距離から睨んでくる瞳に、思わず仰け反る。

「つ、……びっくりせんna！」

「別に驚かせるよつなんことなんて何もしてないじゃない。それより、さつと書きなさいよ」

「この鈍感娘が！ と僕は心のなかで毒づいた。きっとこの女には、恋する男の純情なんぞ一生かかっても理解できまい。

雲の上の恋人たちが、一年に一度の逢瀬を許された夜。「ハーゲンダッツのストロベリーが食べたい」と突然言い出した女王様のわがままを叶えるべく、コンビニエンスストアへやつてきた俺たちは、なぜか飾りつけられた笹の前で短冊とペンを手にしていた。どうやら店のちょっとした企画らしい。ドアの脇に笹が立てられ、その前に置かれた机の上には、色とりどりの短冊とペンが並んでいた。

面白がった彼女に引きずられ、僕も渋々ペンを取った。色紙を切つて作つたらしい短冊に、ふつと懐かしい記憶が甦つてきたのだ。

そういうえば、あのとき小さかった彼女は何を願つたのだろう。

「まじ早くう。せっかく買ったアイスが溶けちゃうでしょー」

「おまえがやり出したんだろうが！ 少しは協調性つていうものを身につける！」

身勝手極まりない言い分にツッコみつつ、俺は彼女から見えない角度で短冊にペンを走らせた。笹の葉のなかへ隠すよ、枝へ紐を結びつける。

「ちょっとちょっと、いったい何書いたのよ？」

「だれが教えるか。プライバシーだ、プライバシー」

「あんたにプライバシーなんて上等なもんはないわー！」

「おまえ、俺をなんだと思ってんだ！？」

縁に埋もれた短冊へ手を伸ばそうとする彼女の背を押し、俺は逃げるようには歸路へついた。店の前でぎやあぎやあと騒ぐ若い男女に注がれる視線なんて耐えられるものではない。

家に着くまでの間、「機嫌斜めの女王様はずつと文句を洩らしていたが、俺は決して口を割らなかつた。

言えるわけがない。

彼女が好きな空色の短冊に書いた願い事。めぐり逢つふたつの星に託した想い。

『ずっと一緒にいられますように』

だれと、なんて今更だ。

幼かつた彼女と、大きくなつた彼女が同じことを願つたと俺が知るのは、もう少しだけ先の話。

Special・3 俺と女王様と悪魔くんの初夢パラドックス（前書き）

2009年新春企画。『となりの悪魔くん』シリーズとのクロスオーバー。

Special . 3 僕と女王様と悪魔くんの初夢パラドックス

「これは夢だ。夢に決まっている。

よし、とりあえず落ち着いて頬をつねつてみよう。……痛い。

肉をつままれ、引っ張られる地味な痛さ。

「よくできた夢だな……」

「何ひとつでぶつぶつ言つてんの？ ものすこしく不審人物なんだ
けど」

隣から突き刺さる視線の鋭さまでリアルだ。最近の夢は現実感に
溢れまくっているんだなあ。まったくもつて人類の進歩！

「本原くん、気持ちはものすごくわかるんだが、痛々しいからやめて
くれ……」

上村の哀願に、俺は超重力を食らつてがくりと崩れ落ちる。同じ
年にしては小柄な少女の隣では、やたらと皿の細い男が「ほうほう」
とわざとらしく頷いていた。

「あんたが『俺』か。てえことは、お隣の彼女が噂の女王様？」

「神崎苑香よ」

どうしておまえは平然としているのだ。いつもどおり偉そうな口調で名乗った俺の幼なじみに、変態の疑惑を持つ悪魔はにっこりと笑んで、それはそれは優雅な一礼を決めた。

「お初お目にかかる。我が名はメフィストフェレス。魔界に棲まう闇の眷属にして、人の世においては悪魔と呼ばれしもの。女王陛下におかれましては」「機嫌麗しゅう、何よりと存じ上げる」

「うむ。苦しゅうない、面を上げよ」

どうしてそんなにノリノリなのだ……。

心のなかで虚しいシッコミを入れるしかない俺の肩を、上村が無言で叩いた。

俺の記憶が正しければ、今日は新年第一日目つまり元旦。例年のように両親や幼なじみ一家とともに、初詣に行つたりおせちに舌

鼓を打つたりお年玉の金額に唸つていたりしていたはず　なのだ
が。

父さんとおじさんの酒盛りに無理やりつき合わされ（もちろん俺はオレンジジュースだ。未成年は飲酒禁止！）、根掘り葉掘り彼女とのことを追及されていたあたりで記憶が途切れている。

「しかし、なんともおかしな初夢ね」

「……は？」

「初……夢？」

「やつぱこれって夢なのか？」

「そうじゃなかつたらありえないでしょ」「

彼女は呆れているというよりも馬鹿にしきつた目で睨んでくる。
ちくしょ、おみくじの『凶』がこんなところで発揮された！

「んー、正しくは夢であり現実でもあるってところかな」

メフィストフェレスはひょいと肩を竦め、狐の面に似た奇妙な笑
みを浮かべた。

「夢だからこそ『ありえないこと』が『ありえること』になる。潛
在意識下での現だからこそ逆説が裏返る」

「……メフィスト、言つてることがさつぱりなんだが」

「めかみを押さえながら上村が唸る。常々悪魔の言動に翻弄され
ているだろう苦労が滲む姿に、涙と親近感を抑えられない。

途端に悪魔の笑顔が甘くなつた。ブラックコーヒーが真っ白にな
るまでミルクとガムシロップをぶちこんだよくな。

どこにでも視覚的暴力に訴える色ボケはいるのだな……。

「そうだなあ。つまり、この夢は俺たちが眠りながら見てる夢であ
ると同時に、共有の精神世界で起こつてる現実　つてことだ」

「…………要するに、わたしたちは幽体離脱して魂だけの状態で顔
を合わせてるつてことか？」

「うーん。違わなくもねえ、かな」

魂までは飛ばしてないんだけどねえ、とメフィストフェレスは呟
いている。どうこう理屈にしき、非現実なことには違いない。

「ぜんぜん世界観が違うんですけど……」

「いやどうおたくと違つてラブコメの看板しか掲げていないので。

……胸を張つてそだと言ひきれないあたりが悲しいが。

「だから、それが『恋』の法則なんでしょうが。いつまでぶちぶち文句垂れでんのよ。まったくみみつちい男ねえ」

「悪かつたな、みみつちくて！ ひとりくらいこいつやつがいねえとボケ倒しになるだろうが！」

「おいそこのヘタレ。うちのとーこたんのシツ『ミリ』やあ足りねえつてのか？」「

「とーこたん言つな！ だいたい、わたしひとりじやおまえたちのボケなんて捌ききれないわ！」

「あべしつ」

ぶへつと奇声めいた呻きを上げて、色ボケ悪魔が地に沈む。むう、なんとキレのある裏拳なのか。

「気にしないでくれ、本原くん。きみがいるお陰で大いに助かってる。特に精神衛生的な意味で」

「上村……」

俺たちはがしりと固い握手を交わした。掌から伝わる熱い友情：

……！

「カノジヨの田の前で浮氣なんて、いい度胸してるわねえ

「あだ、あだだだだつ！ 痛い痛い、耳がちぎれる！」

ぎりぎりと片耳をねじ上げられ、俺は悲鳴を上げた。犯人である女王様は、目を逸らさずにはいられないような笑顔で凄んでくる。

「いつそちぎれちゃいなさいな。涙に濡れる乙女心も聞こえないような飾りものなんて！」

「俺はテレパシストじゃねええ！」

「愛の力でなんとかしなさいよ！」

そんな無茶な。愛の力でテレパシー可能なら、この世に電話は発明されていない。

どうして俺の恋人は、もう少しかわいげのある方法でやきもちを

焼いてくれないのだろうか。

まあ嘆いたところでしようがない。女王様であることじや、彼女の彼女たる所以なのだから。そんな幼なじみにうつかり恋してしまつた、すべては惚れた弱味である。

気が済んだらしくようやく耳が解放されたといひで、俺はふてくされている彼女の頭を軽く叩いた。

「あのなあ、俺が浮氣するとか思つてんのか?」

「あたし以外の女と手えつなぐなんて立派な浮氣よ」

「どんだけ心狭いんだ、おまえは……」

「じゃあはじめは、あたしが目の前で別の男と仲よせんへん手えつないでても平氣なわけ?」

じりりと睨み上げてくる深い色の双眸に、俺はうつと言葉に詰まつた。

……かなり、いやまったくもつて許しがたい。

顔に胸中のすべてが出たのだろう、途端に彼女はにやにや笑いを広げた。

「わかつたらもう一度とやらなによつこ

「……了解」

掌の上で遊ばれているというか、頭が上がらないというか。安易に予想できてしまつ未来図にため息をつきたくなつた。

「……どうしよう。わたしはどうすればいいんだ」

「いやいや。まったくお熱いことで」

途方に暮れた上村とメフィストフェレスのなげやりな咳きに、慌てて我に返る。そういうえば今更なのだが、どうすればこの夢は覚めるのだ?

その疑問に、メフィストフェレス先生が實にあつけらかんと答えてくれた。

「まあ所詮『夢』だからな。肉体が眠りから覺めれば、自然と意識も現実世界に引き戻されるわ」

「それまでどうしようと……」

「こたつにでも入つて『じんぐり』しながら、蜜柑を食べてろつて」と
じゃない？」

ほり、と彼女が指示した先には、大きめのサイズのこたつがでんつと陣取っていた。卓上には、籠に盛られた蜜柑の山。瑞々しいオレンジ色が目にも鮮やかだ。

「え、えつ？」

上村が動搖するのも無理はない。俺たちはいつの間にか、六畳ほどの和室にいたのだから。では、先ほどまでどこにいたのかというと、わからない。

明るかつたか暗かつたのか、暑かつたのか寒かつたのか。まるで霧のように朧げで、具体的な記憶を結ぶことができない。

「その場に集う意識が共通の認識を持てば、それが現実となる。いやあ、まったく精神世界つてのは便利だよなあ」

混乱したままの上村の手を引き、いそいそとメフィストフエレスがこたつに入る。専門家というのは、一般人を置き去りに順応してしまうからたちが悪い。

「ねえ。突つ立つてたつてしうがないから、あたしたちも座ろうよ」

「……そうだな」

能天氣といふか無邪氣といふか、どこだらつと揺らがぬ彼女の笑顔に、俺は脱力しながらも苦笑した。

きっとこの出会いは一期一會。どこかのだれかの気まぐれが生んだパラドックスの奇跡。いづれは覚めてしまつ夢ならば、心ゆくまで満喫しようではないか。

ぬくぬくとこたつであたたまり、蜜柑を食べながらしゃべり倒す。

そんな初夢も悪くない。

ではまず、この言葉からはじめようか。

あけましておめでとう！

c (^
e A
f h
i a
r p
s p
t y

d n
r e
e a
m y
o e
f r !
t h
e a
y e
r h
. a
n
i

Act・3完結記念 僕と女王様で『カップルに20の質問』に答えました。

決着編完結記念企画。本編読了後推奨。

Act・3完結記念 僕と女王様で『カップルに20の質問』に答えました。

?「こらにちばー血口紹介をどりわ。

「神崎苑香、十七歳。高校一年生よ。性別は美少女」

「なんだよ、性別美少女つて。素直に女だつて言えよ」

「純然たる事実なんだからいいじゃない」

「ツツコみづらいほどきつぱり断言したな！ タヂガ女王様……」

「なんか言つた？」

「いーえ、何も言つてませんよ。だから肘で鳩尾をぐりぐり突いて
くんのはやめてください！」

「まつたく。ほら、わざとあなたも自己紹介しなさこよ」

「だれのせいだと…………いえ、なんでもありません。慎んでさせ
ていただきます！ ……えーっと、名前は本原はじめ。十七歳、高
校二年生。性別は男」

「名前のせいで女に間違われたこともあつたわね」

「余計なことは言わんでいい！」

?「あれえ？お一人さん、カップルにしては離れすぎじゃないですか
あ？（ニヤニヤ）

「そう？ じゃあもうとくつついたほうがいいかしら」「ひ

「ちよ、ぱつ、そんなに密着すんな！ もう充分近いだろ？が！」

「……そんなんだから追い詰めたくなるんでしょうが」

?「じゃあ、そんな事を言つあなたに質問。お相手の何処が好き？面
と向かつて告つて下せー！」

「！」この質問に答えるべきなのは俺なのか…？」

「当たり前じゃない？ で、あたしのどこを愛してるって？」

「なんか勝手に進化してるし… ど、どいつて言われても……」

「……思いつかないなんて言つたらぶち殺すわよ」

「そんなん考えたことねえんだよ… なんていうか……いろんなものをひつくるめた、全部? ……いや、ちよつと待て。俺なんかとんでもねえこと言つちま」

「……まあ、今回は勘弁してあげるわ」

? ゲヘゲヘ…

「やつぱつ言つちまつたー… セツキのカット、カットしちゃ…」

「ぱつちつ生放送で流れたわよ」

「ああ……」

? ああ、すみません。じゃあ告られた君に質問。『『直セジヤ』』
ああ!…と、相手にぶつちやけて下さー。

「奥手なんていうもんじやないほどへタレなと」
情けなれずさてぶん殴りたくなるときがあるわ

「精進します……」

? あああ…そんな険悪にならねー!

「別に険悪にはなってないわよ? 事実を言つてるまでだし」

「……もはやぐうの音も出ねえよ」

? あら、そうですか。『テートで手をつないだりします?

「そもそも『テートをまだしたことがないからな……」

「寝こみを襲われかけたことはあるけど」

「マジでそのネタを引っ張るのはやめてくれー… ていうが俺のときは未遂だっただけど、おまえこの間……つ

「セーー、なんの」とかしら?」

? 人前でイチャイチャします?

「しない。絶対しない」

「むしろ『できない』でしょ?」

「放つとけ。ていうか、おまえのスキンシップが過剰なんだよ…」

「いいじゃない、そういう関係になつたんだし」

「だ〜か〜ら〜ッ！」

？他のカップルが羨ましいと思つたことはありますか？

「周りにいるカップルが微妙だからな……」

「そうねー。でも思わないわけでもなかつたわ。どこのだれかさんがあまりにもヘタレすぎて」

「…………」

？それは何故？

「いやだつて、一番身近なカップルが長谷と松下だぞ？ あのふたりのいちゃつきぶりつづたら一種の視覚的暴力と化してるし、しかもなんか黒いものが滲み出てるし……！」

「ある意味最強のバカップルよね」

「激しく同感」

？女の子に質問。自分の彼氏を本棚の中にあるもので例えてみて下さい。

「H口本」

「即答かよ！？」

？男はリアクションせよ！

「よりによつてそれか？ もつとマシな本があるだらうが！」

「だつて所詮、健全な男子高校生の頭の中身なんてそんなもんですよ？」

「おまえ喧嘩売つてんだろ？ そつなんだろーー？」

「えー。じゃあブックスタンダード」

「もはや本じやねえし…」

「本棚のなかにはあるでしちゃが。他人を支えようとして逆に押し

潰されるよつなお人好しのあんたにはぴつたりでしょ

「……これは褒められてんのか？」

?じゃあそんな君は彼女を天気に例えるとどうなりますか?

「台風」

「それって天気なの?」

?それは何故?

「自分の思ひがままに蹂躪していくから。主に俺の理性とかプライドとか」

「それはつまり殴られたいってことかしら?」「事実だろ! サリげなく拳をかまえんな! あと、通りすぎたあの世界が驚くくらいきれいに見えるから」「…………」

?彼氏君あんな事言っちゃつてますよ~?

「ツツツツのくせに、たまにとんでもない天然発言するのよね。あれで素なんだからおそろしいわ……」

「おまえに言われたくねえよ~」

?結婚するとしたら亭主関白と力カア天下、どちらがいいですか?

「いいも悪いも、必然的に後者になるわね」

「反論できない自分が悲しい……」

?チエリーボーイって可愛い響きじゃありません?

「いきなり爆弾投下しゃがつた……!」

「そうね、かわいいわね。あまりにも焦れったくってこっちが食べたくなるくらいには」

「おまえも真顔でそういうことを言つな! 頼むから羞恥心つていのものを持て!」

?彼氏君、ぶつちゅけ自分と彼女ならどうが可愛いと思しますか?

「そりゃ……」

「断然俺のほう!」

「なんでだよ! 僕のどじがどうかわいいとー?」

「そういう自覚がないといつて、ねえ。つまりあたしのほうがかわいいつて思つてること?」

「へつ、あ……いや」

「どうなのよ?」

「だ、だから……～～」

「どうなのよ?」

?彼氏に踵落としを入れて下さい。

「なんでだよ! ?」

「どちらかっていえば、アッパー・カットのほうが得意なんだけど

「おまえも悪乗りするな!」

「しょうがないじゃない。ほら、いくわよ」

「え、ちょっと……膝上十五センチのスカートでそんな……せいやあああ!」

?彼氏君がパンツを見れて鼻血を出しちしました。彼女さん、最後にコメントを。

「ホント情けないわよねー。こまじきそんな男子高校生いないわよ

?」

「これは鼻血じゃなくておまえのローファーが額にクリティカルヒットしたせいだろうが! もはやD/Vだわ!」

「そこに愛があればいいのよ

「微塵も感じられないんですけど!」

「修行しなさい、修行。少なくとも次の連載がはじまるまでには」

「なんかもう無茶とも言えねえ難題出しあがった……!」

「というわけで、そこの人間はたしてこいつがあたしの溢れん

ばかりの愛を感じられるようになつてゐるかどうか、しっかり見届けなさいよ。いいわね？」

「結局最後まで女王様……」

Question by 零弦ストリップ (<http://m-pe.tv/u/?0blackluck>)

「とあるカップルについて」で座談会～男子会編（前書き）

サイトのWeb拍手の元・お礼文。男子トリオが語る主人公カップルの実態。

「とあるカップルについて」で座談会／男子会編

「 - - 」 座談会を始める前に、まず今日の出席者を確認します。
ひとりずつ自己紹介をどうぞ。

「はいはいはーい！ 一年C組演劇部所属、香坂京平っす！ 好きな女の子のタイプは、おしとやかで背の低い娘！ 断じておれよりちょっとでかい男女なんかじゃない！ ちなみにどうちかつていうと巨乳派だ！」

「同じく一年C組、長谷悠也です。所属クラブは文芸部です。好きな女の子のタイプは、ちょっとほほえみчивりして料理が上手でかわいい笑顔でさらっと毒を吐いたりする女の子です。個人的にはあってもなくてもかまわないけど、抱き心地は最高だよ？」

「いやいや長谷さん、それタイプとかじやなくてきみのカノジョのことだから！ 最後に至っては断定してるから！ つてか、なんか生きしくてやらしくよ…」

「だつてホントのことだしね？ そういう香坂もシンデレーレ的な意味で充分断定的だけど」

「あはは、おまえら素直だなあ。あ、俺は富野照史。こいつらと同じ一年C組、ちなみに部活は野球部でポジションはキャッチャーだ。好きな女の子のタイプは……そだなあ、すらつとしててキリッとしたカンジなのに中身は女の子らしい娘か？ 美しい声で応援されると俄然やる気が出るな。あ、ちなみに俺もあってもなくてもどちらでも平気」

「…………ねえ、長谷さん。あれって……」

「たぶん無自覚なんだろうねえ。そういうえば彼女、放送部だったけ…………」

「富野も素直だよな」

「〇一 今日のトーマは「とあるカップルについて」ですが、ど

のカップルについて話しますか？

「そりゃあもちろん、あのじれじれバカップルしかいないよな」

「なんたって主役だしね」

「俺らはしがない脇役だしな」

「そーゆーことを言つちやだめじゃん！ 悲しくなるじゃん！」

「まあまあ、作者によると俺らがメインの話もそれぞれ考へてるらしいから」

「まだネタだけかよ！」

「いつたいいつになる」とやらねえ

「気長に待とづば」

「〇二】 その2人がカップルになつたことを、皆さんはいつ頃知りましたか？

「どうか、おれたちがくつつけたようなもんだよな」

「リアルタイムで（生）あたたかく見守つてきたよね」

「いや～、ホント長い道のりだったよな」

「どう見ても両想いなのに、ゼーんぜん気づかねえんだもん。本原が

「本原だからねえ」

「本原だからなあ」

「〇三】 その2人はお似合いですか？ どのくらいラブラブなんでしょう？」

「お似合いとかいう以前に、お互いのことしか眼中にないよな」

「ふたりにとつて、異性はこの世でひとりしかいないんだろうね」

「あ～、納得」

「……去年の冬にさあ、学校帰りにコンビニ寄つて立ち読みしてたときには、雑誌のグラビア見て本原なんて言つたと思つ？」

「なんて言つたんだ？」

「『寒そう』つて」

「 「 …… 」 「

「まあ確かに、真冬に水着姿つてちよつとアレだけじわ」「きつとそれが神崎女史だつたら、茹で蛸になつてトイレに直行するだらうけじね」

「あいつ、純情だからなあ」「

「 04 」 じのカップルのこんなシーンをみてしまつた！

「『はー、あーん』はいつもだよね」

「膝枕と膝抱っこもしょっしゃうめつてゐるよな」

「そういうえば海の家でバイトしたとき、本原が神崎の足の爪切つてやつてた」

「 「 …… 」 「

「 05 」 じこだけの話、2人がイチャついていることに腹が立つたことはありますか？

「うーん、腹が立つてじゅうつ、じつ……生ぬるーい気持ちになるつていうか」

「微笑ましいよね。主に本原が」

「たまに胸焼け起こしそうになるけどな」

「富野でも思うんだ……！」

「『砂を吐ぐ』つて言葉をはじめて理解したぜ……」

「無自覚つて最強だよねえ」

「 06 」 じのカップルに似合つてお店や場所はどうだと思いますか？

「場所があ……あのふたりにそんなの関係なさそうだけだな」「こつでもどこでもばかってないからね」

「……それを長谷やんには言われたくない」と思つ

「何か言つたかい？」

「イイエ、何モ言ツテナイデスヨ?」

「そりだなあ……本原んち?」

「自宅かよ!」

「ふたりつきりだと直行で帰つてゐみたいだしね

「インドア派バカップル……」

「〇七」 しの2人はケンカはしたりしますか?また、どちらかから相談された経験のある方はいらっしゃいますか?

「あれは喧嘩といふべきか?」

「むしろ、肉食獣の猛攻から哀れな草食動物が必死に逃げようとしてる光景だよね」

「たいてい捕食されてるけどな……」

「基本的に本原は神崎女史にべた惚れで甘々だから、なんだかんだ言いつつ勝ちを譲るんだよねえ」

「結構幸せそうだよな」

「愚痴も相談もないもんなあ。まつ、それが一番いいんだろうけど

れ」

「〇八」 鹿さんはこのカップルを応援していますか?それともイヤイチヤを阻害したいと考えていますか?

「いや~、馬に蹴られて死にたくないですから」

「あのふたりの場合は、砂糖に埋もれて窒息死しそうだけね」

「ま、でも、幸せそうだと恋のキュー・ピッヂをした甲斐もあるよな」

「そりゃあもちろん、そうでなかつたら本氣で怒るよ?」

「あれだけカリカリさせたんだもんな~」

「あいつらは果報者だよなあ」

「〇九」 これからこのカップルはどうなると思いますか?

「え、結婚するんだね?」

「まあ、そうだよな」

「やつだろ?ね」

「おれ的予想だと、高校卒業したらソシローで神崎が本原を搔つさ
らいそ?」

「確かに、あのふたりは『嫁入り』よりも『婿入り』ってカンジだ
な」

「本原が専業主夫で、神崎がバリバリ稼いでそうだな~」

「かかあ天下の鑑になりそうだよね」

「間違いないねえなあ」

「右に同じく」

「10」では、今日のテーマ「とあるカップルについて」のまとめをお願いします。

「総括つてこと?」

「詰まるところ『じれじれバカツプル』だよな」

「富野やーん、ふりだしに戻つてるから」

「まあ妥当だよね」

「長谷やんまでそこに落ち着いちやうんだ!?」

「他にどつ言い様が?」

「うー、あー、そーなんだけどー」

「じゃあ、あれか?『俺と女王様』」

「「それはタイトルですか?」」

「-」お疲れ様でした。

「いやー、語つた語つた

「だけどなんだろ?.....語づくへ渡つたってカンジがしないんだよな

「.....」

「あのふたりこつこつだからねえ」

「ありすぎて困つちやうよな」

「愛だねえ」
「いやいや、それをいうなら友情だからー。」
「まとめるに『友愛』だな」
「意外とうまい！」
「座布団何枚？」
「一枚かな」
「長谷やんてば手厳しへ」
「これも『友愛』だよ」
「嬉しいひとつで」

Question by あなべり (<http://99.jp/n.or/ga/a/ga/>)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3748m/>

俺と女王様

2011年6月18日13時47分発行